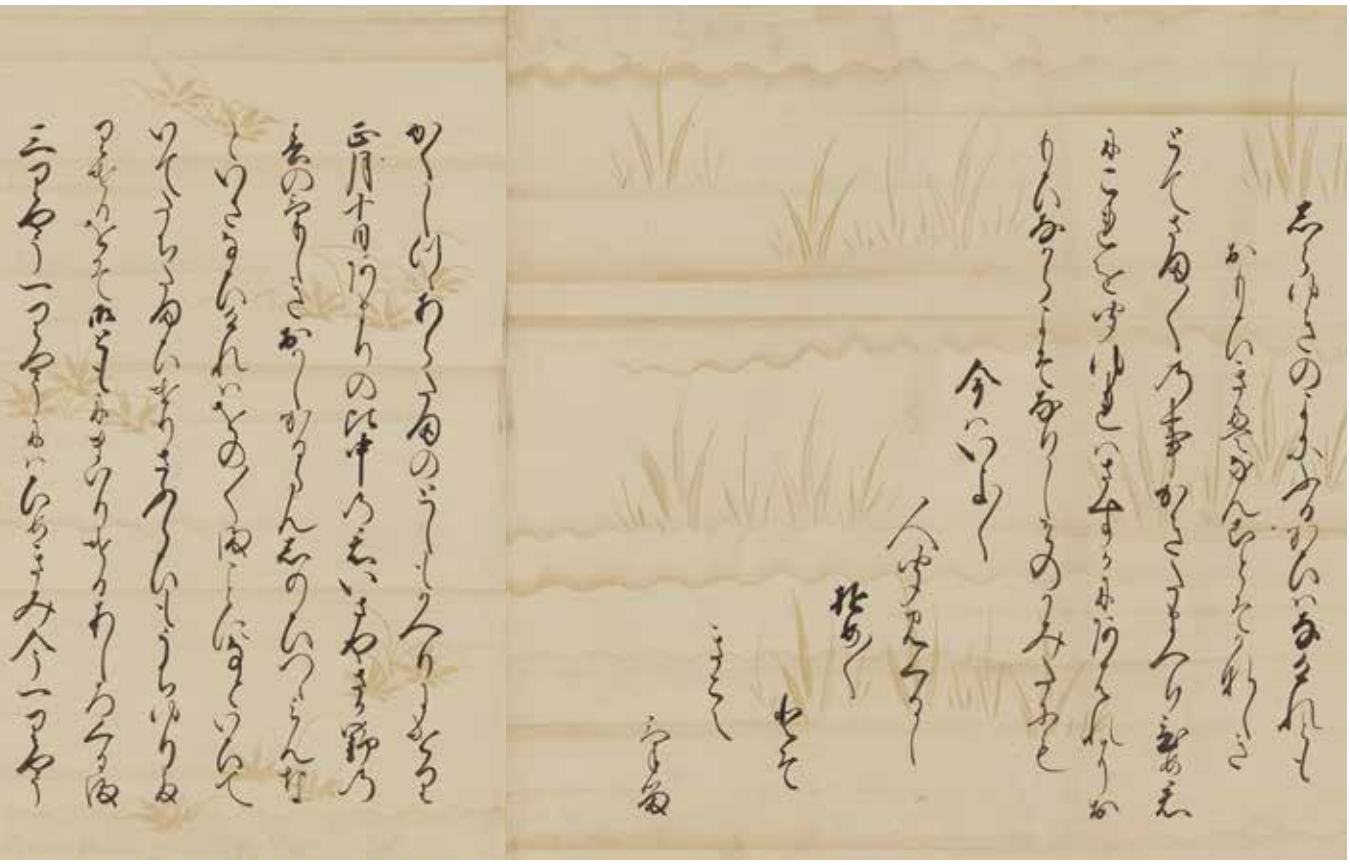
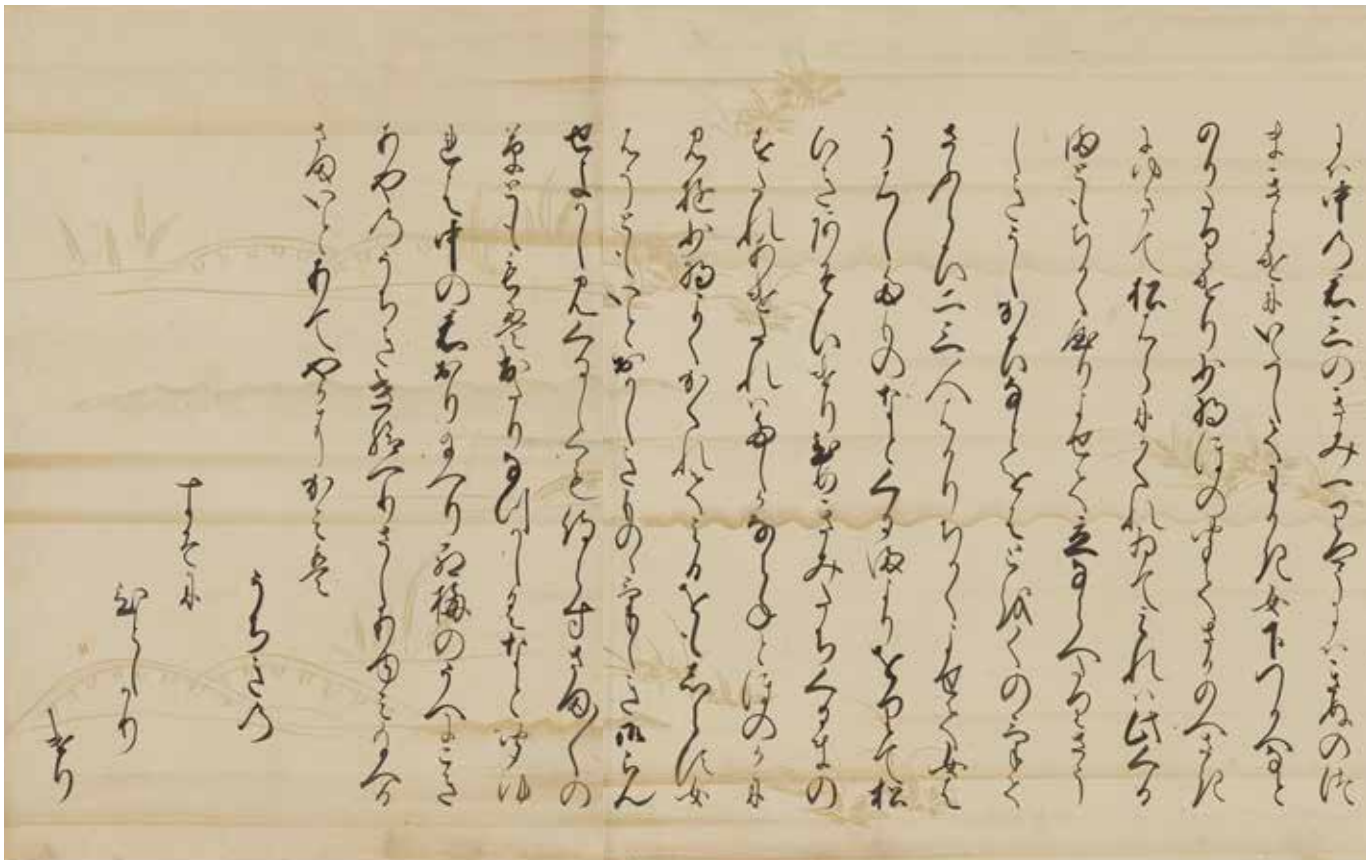
出光美術館研究紀要第二十八号抜刷
二〇二三年三月二十五日発行

旧プライス・コレクション「住吉物語絵巻」略解題・詞書翻刻

廣海伸彦





口絵 3　住吉物語絵巻（上巻・部分）　江戸時代　出光美術館

旧プライス・コレクション「住吉物語絵巻」略解題・詞書翻刻

廣海伸彦

序言
一、作品の概要
二、段落構成
三、絵画的特徴
結語

序言

二〇一九年、アメリカのエツコ&ジョー・プライス・コレクションの一部が、出光美術館の所蔵作品に加えられた。あらためて述べるまでもなく、このコレクションの白眉は、既存のアカデミズムから距離を置いた、すぐれて個性的な画家たちによる絵画である。これまでに考察の俎上に載せられがちであったのも、伊藤若冲（一七一六―一八〇〇）をはじめとするエキセントリックな画家たちの仕事が大半であった。一方、このコレクションに、狩野家や土佐家のように正統的な流派に属する画家たちの絵画も数多く含まれることは、いま一度注意をうながしておくべきことがらである。この小稿では、そのうちのひとつである「住吉物語絵巻」（以下、旧プライス本と略称する）について解説を記し、今後の研究に供したい。とくに、絵画表現の特徴を確認しながら、筆者問題と作品の制作年代を推察することが、この小稿の目的である。

一、作品の概要

この絵は、三巻からなる。各巻本紙の寸法は、縦が三二・三センチメートル。横は上巻が一五九九・五センチメートル、中巻が一五三八・八センチメートル、下巻が一三九三・四センチメートルである。本文の末尾には、各紙の詳細な寸法を記した。

表紙には経年による損傷が認められる。それぞれの巻には題箋が貼付されており、金砂子で装飾された料紙の上に「住吉物かたり」の文字が墨書され、その下にはそれぞれ「上」「中」「下」の一字が記される［図1］。ただし、各巻を記す文字は内容と符合せず、「中」と記された一巻は下巻の内容を、「下」と記された一巻は中巻の内容を収録している。本稿において巻名を呼ぶ際には、題箋の記載にもとづくのではなく、物

語の叙述に即した呼称をもちいる。

表装の傷みにくらべて、本紙の保存状態はおおむね良好といえる。各巻の長大な画面には、詞書と絵が交互に連なる。詞書は、植物の金泥下絵で華麗に飾られた料紙の上に、謹直な筆致でしたためられている。絵にも、細部の描写に意が注がれつつ、端正な表現が示される。一部の紙継ぎが剥がれる、縦方向の折れ皺が入るなど、巻子装の作品に一般的な損傷が認められるものの、全体としては制作当初の表現が失われてはいない。テキストは、いわゆる流布本系に符合しており、それと照合させたとき、中巻の一部には錯簡がある。

図1　住吉物語絵巻　出光美術館
（旧プライス・コレクション）

二、段落構成

この絵巻の主題は、平安時代に成立したと思しい著名な継子譚『住吉物語』である。段落構成と絵の内容は、次のとおり。

上巻

第一段　中納言兼左衛門督には諸大夫の娘と皇女腹の娘の二人の妻がおり、後者に美しい姫君が生まれた。月日が過ぎ、姫君が八歳のとき、その母は病に苦しみつつ姫君の入内を望む。絵は、中納言に引き取られた姫君が、継母とその娘二人と面会しているところ。

第二段　姫君の母が亡くなり、中納言は諸大夫の娘のもとへ戻った。姫君は悲しみに暮れつつ十歳になると、中納言は西の対を整えて、そこに姫君を迎える。姫君は、継母と異腹の姉妹である中の君と三の君と暮らすことになる。右大臣の子息である四位の少将は、姫君の見目麗しいことを聞いて手紙を書き、かつて姫君の母宮に仕えていた人物の妻・筑前に命じて届けさせる。絵は、少将が、姫君に宛てた文をしたためるところ。

第三段　筑前は、中納言家へ行き、姫君の乳母子である侍従を通じて少将の手紙を姫君へ届ける。少将は重ねて手紙を書くが、姫君からの返事はない。その様子を見た継母は、手紙の差出人を知ると、三の君へ振り向けるように謀る。絵は、三の君からの祝儀として、継母が袿を用意するところ。

第四段　少将は、継母の思惑どおりに三の君のもとへ通い、寝殿の東面に住んだ。ところが、西の対から聞こえてくる琴の音の主が姫君であることを知り、真相が発覚する。少将は、あらためて姫君に宛てた手紙を書き、侍従に託す。新年を迎え、中の君は姫君と三の君を誘い、嵯峨野へ出かけることを思い立つ。そのことを聞いた少将は先回りをし、松の木陰に身をひそめて姫君たちの様子をうかがう。絵は、姫君たちの小松引きと、その様子を少将がうかがい見るところ。

第五段　姫君は周囲にうながされて野に降りるが、少将にのぞかれていることに気づき、車に戻る。少将の姫君に対する想いは、強くなる

ばかりであった。やがて、姫君の乳母が病み、見舞う姫君に対して自分の死後は侍従を頼るように伝える。絵は、姫君が乳母の見舞いにおもむくところ、または姫君が離京するところか。

第六段　乳母が亡くなる。四十九日が過ぎ、侍従は姫君のもとへ戻る。少将が西の対を弔問し、侍従を慰めて手紙を渡す。絵は、少将が西の対を弔問するところか。

第七段　姫君は、少将に返事を書く。少将はよろこび、姫君への想いをさらに募らせる。

中巻

第一段　少将の心は、三の君から離れてゆく。やがて、中納言は姫君の入内を決める。これをねたむ継母は謀略をめぐらせ、姫君が六角堂の別当法師と通じているかのような光景を中納言に見せる。中納言は、姫君の入内を断念した。絵は、法師が姫君のもとを去る様子を、中納言と継母が見るところ。

第二段　中巻第六段の前の内容。姫君は、住吉の尼の迎えの車で京を離れた。少将が侍従を訪ね、姫君の不在を知る。絵は、西の対を訪れた少将が姫君の不在に気づくところ。

第三段　姫君の行方がわからなくなったことを、中納言や中の君、三の君も知る。姫君の手紙を見つけ、悲しむ。継母は、侍従にそそのかされたことが理由という。離京した姫君は、淀まで下る。絵は、西の対を訪れた中納言たちが、姫君の不在を嘆くところ。

第四段　中段第一段の続き。西の対を訪れた中納言は、入内の計画を断念したこと、さらに内大臣の子息との縁談を姫君に告げる。継母は、これも妨害しようと考え、主計頭という老人に姫君を嫁がせようと企てる。絵は、継母と主計頭が対面するところ。

第五段　継母の謀略を知った姫君と侍従は、母宮の乳母が尼となり、住吉に住んでいることを思い出して手紙を出す。尼からの返事には、上京する旨が記されていた。中納言は西の対を訪れ、別れを決意した姫君と対面する。絵は、中納言が西の対に姫君をたずねるところ。

第六段　住吉に到着した姫君は、尼君が西方浄土を願って勤める姿に触れる。絵は、姫君と尼君が住吉で暮らすところ。

第七段　姫君は、自分が生きていることを知らせる手紙を、京に届けさせる。絵は、中納言、継母、中の君、三の君が姫君からの手紙を見るところ。

第八段　中納言たちは、姫君の身を案じる。

下巻

第一段　姫君の身を案じる少将（中将に昇進）は、初瀬に参籠した。すると、夢に姫君と思しい女性があらわれ、住吉にいることを告げる。絵は、少将が長谷寺に参詣するところ。

第二段　住吉に来たものの、依然として姫君の居場所がわからずにいる少将は、童子から京の尼上の住まいを教えられる。絵は、住吉社頭で少将が松葉掻きの童子と対面するところ。

第三段　少将は、姫君の居場所をたずねあてる。絵は、姫君が琴を弾く室内の様子を、柴垣の外から少将がうかがうところ。

第四段　侍従との問答のあと、尼君は少将を招じ入れる。少将は、ついに姫君と再開した。絵は少将と姫君が対面を果たし、隣室に尼君と

侍従が控えるところ。

第五段　少将を追って京から参集した公家たちが、管弦の遊びを催した。姫君たちはこれを聞いて心の晴れる思いがした。絵は、少将たちが楽器を奏で、それを御座船の姫君たちが聞くところ。

第六段　姫君は、少将とともに帰京を果たす。やがて、姫君は男児と女児を続けて生んだ。絵は、姫君が出産するところ。

第七段　姫君の子がそれぞれ七歳と五歳に成長し、袴着に中納言（大納言に昇進）を招く。姫君は、父との再会を果たした。絵は、父と娘が対面し、涙を袖で拭うところ。

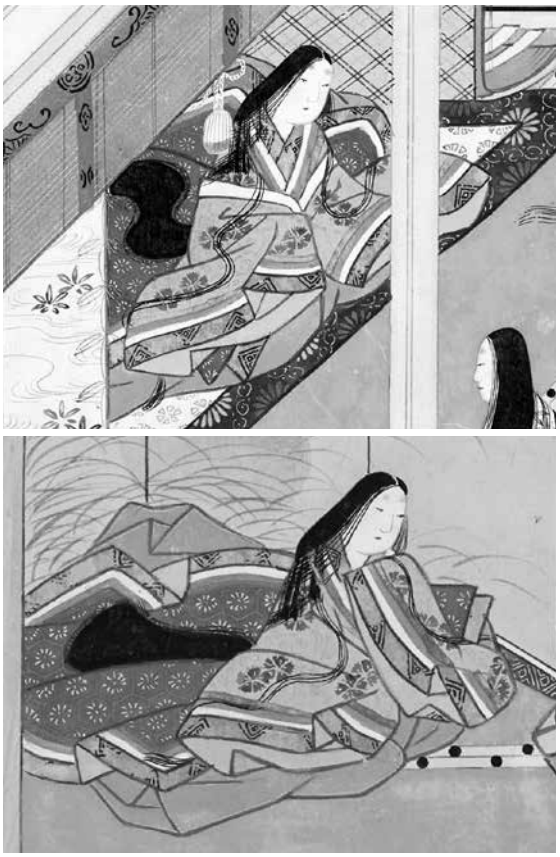
第八段　中将と姫君、その子たちは幸せになり、継母は侘しい晩年を過ごした。

三、絵画的特徴

この絵巻の、絵画としての特徴を記す。考察の前提として、いちおう押さえておくべきことは、工房制作の問題である。比較例として、ここでは上巻と下巻に描かれた姫君の顔貌表現を出そう［図2・図3］。二つをくらべれば、上巻のほうが頭部の幅は広く丸みがあり、目間は遠い。また、上まぶたの線は相対的に緩やかな孤を描き、瞳をはっきりと見せる。鼻をあらわす墨線は鼻根のあたりで軽く屈曲し、息の長いなだらかな曲線が鼻梁をかたちづくっている。上巻は、相対的に柔軟な筆づかいを操る画家の手で仕上げられており、この人物がこの絵巻の制作を主導したものと思しい。ただし、絵巻のように長大な絵画を考察しようとするとき、複数の画家による分担制作であることは、むしろ当然の作画体制である。ここでは、微細な筆分けに執心するよりも、絵巻全体がよく統率された様式でまとめられていることを、素直に評価するのが適当だと考える。

それでは、この絵巻の制作を主導した画家は誰か。以降、図様と描写の両面から考えてみたい。まず、図様の系統について、新年の嵯峨野の場面を例に取ろう［口絵3］。三台の牛車が野辺に停め置かれ、そのあいだには小松引きに興じる女性たちの姿が描かれる。この画面構成には、同じ主題を描く静嘉堂文庫美術館の絵巻（以下、静嘉堂本と略称する）の図様系統が強く意識されている［図4］。絵巻の下縁に沿って丘陵を展開する画面構成や、三台の牛車のうち二台を巻頭のほうに並べ置く点に近いものを感じさせる。さらに、このような大まかな構成の類似のみならず、いくつかの図様にはほとんど同一のものが認められる。まず、

並列する二台の牛車の近くから姫君が乗り込む一台のほうへ歩み寄る女性の群像が、人数に違いはあるものの、旧プライス本にほぼそのまま踏襲されている。その左側に停車する一台には姫君がいて、車を降りるように侍従からうながされている。この図様もまた、静嘉堂本に強く依拠している。前簾の開き方や、車内に姿をあらわす姫君の顔の向き、横顔と垂髪をこちらに向けた侍従の挙措などが、ひとつのセットとして旧プライス本に踏襲されているのである。さらに、この場面のもう一人の主役である少将の図様にも、共通点は多い。まず、姫君たちのほうを見やりながら口元を隠すように檜扇を掲げ、もう片方の手で着衣の一部を持ち上げる挙措を符合させる。また、少将の右の松は、手前の一本が右方向へ大きく湾曲しながら幹をのばし、ほぼ直立した一本と交わる。少将の左に生える一本を含めて、松の配置や独特の幹の形態を通わせていることがわかる。



上　図2　住吉物語絵巻（上巻・部分）
下　図3　住吉物語絵巻（下巻・部分）
出光美術館（旧プライス・コレクション）

このように、旧プライス本の制作には、静嘉堂本を淵源とする粉本がもちいられていると見るべきだろう。もちろん、静嘉堂本そのものが、この絵巻の画家の目に触れた可能性を完全に否定する根拠はない。ただ、図様の転用が断片的なものにとどまることは、旧プライス本に参照されたのが静嘉堂本の派生作品であることを示唆している。実際のところ、比較例として本稿の挿図に掲げたのは、静嘉堂本の図様が忠実に写された江戸時代の模本である。これとても、旧プライス本との直接的な関係が結ばれるものではないが、近世において静嘉堂本の図様が写された事実を確認し、特定の画家たちの知見に入っていたことを、ここでは推察したい。

静嘉堂本を端緒とする住吉物語絵巻の図様は、土佐家の画家たちによって中心的に利用され

図4　住吉物語絵巻模本（部分）　東京国立博物館

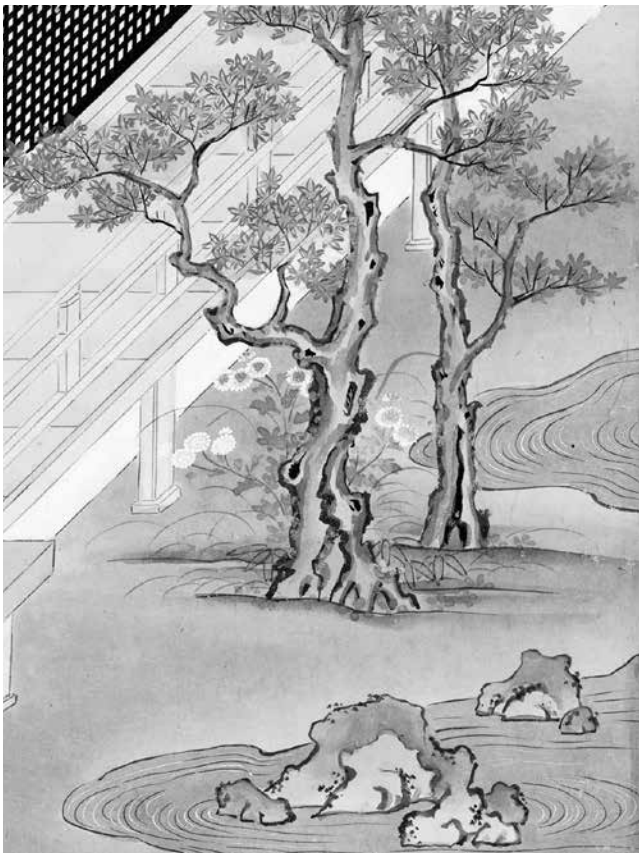


図５　住吉物語絵巻（上巻・部分）
出光美術館（旧プライス・コレクション）

たと思しい。たとえば、京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する「土佐派絵画資料」のうち、「四季行事絵巻下絵」と題された一巻（資料番号1300123501 00）の冒頭には、明らかに静嘉堂本の小松引きの場面と共通する図様が収録されている。姫君が降車をうながされる場面をそのまま写している一方で、この下絵は静嘉堂本の図様の逐一を転写するわけではない。この下絵自体が制作されたのは江戸時代後期と推定されるが、展覧会「土佐派と住吉派　其の二――やまと絵の展開と流派の個性」（和泉市久保惣記念美術館、二〇二一年）に出品された土佐光祐（一六七五―一七一〇）筆「住吉物語図」（一六八八年、個人蔵）のように、静嘉堂本を発端とする住吉物語絵の図様は適宜分節されたり、抜粋されたりしながら、江戸時代の土佐家の画家たちのあいだで継承されたと思われる。土佐家によるこのような絵画制作の文脈の上に、旧プライス本の位置づけは求められるだろう。

次に、個別モチーフの表現を観察する作業によって、旧プライス本の制作にたずさわった土佐家の画家像を推考してみたい。まず、岩と樹木の描き方について［図５］。強めの墨線で輪郭を引き、いくつもの頂点を瘤のような丸い弧線で縁どる岩の表現は、土佐光起（一六一七―九一）の絵画に近いものを見いだすことができる。この類似を確認する例として、光起の「十二ヶ月歌意図巻」（東京国立博物館蔵）を挙げよう［図６］。また、旧プライス本の樹木には、幅の広い墨線が幹の中央、または二本の輪郭

図６　十二ヶ月歌意図巻（上巻・部分）　土佐光起　東京国立博物館

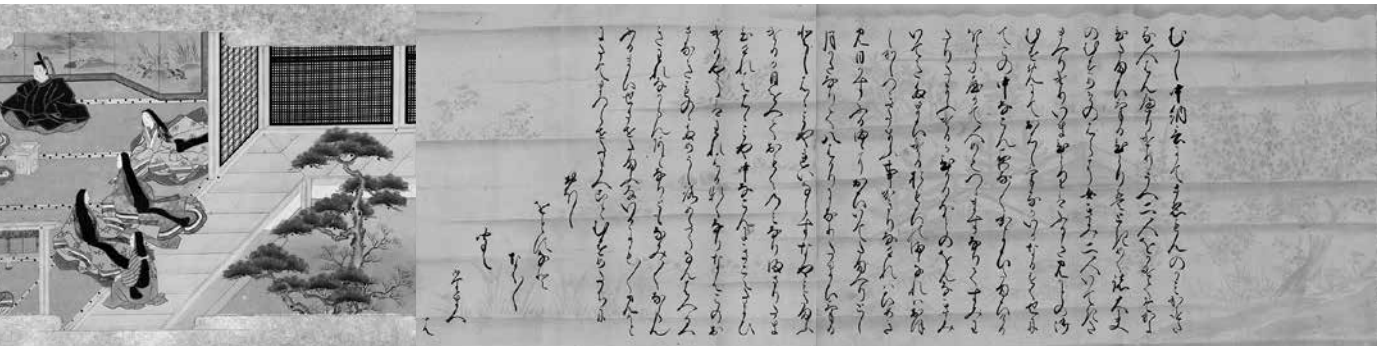
線のどちらかにひと筋引かれる表現が見られる。これも、光起の絵画のなかに共通する特徴といえる。ただし、どちらの特徴も、旧プライス本のほうにいくぶん硬直したかたちであらわれており、画家の個人差や年代差を想定するのが適当だろう。このような観察結果は、人物の表現にも適用できそうである。光起が歌仙絵や物語絵で見せるまろやかな人物の顔立ちは、旧プライス本とある程度は共有されているように思われる。ただし、黒目が上まぶたのなだらかな弧線に接し、上目づかいをするような表現、また、鼻尖と鼻根、鼻尖と鼻柱を結ぶ二本の描線がおおよそ同じ長さで伸びる点が、光起に特有の人物画の特徴として知られるのに対して、旧プライス本の人物は、これらの特徴を必ずしも持っていない。また、直線を中心にかたちづくられる着衣の表現も、弧線を多用し、ぼってりとした布のかたまりをあらわす光起画とは印象を異にしている。

簡略な比較ではあるが、旧プライス本は光起画と一定の共通性を示す一方で、具体的な筆者として光起を想定するには躊躇するべき相違点も多くある。十七世紀後期に光起周辺で活躍した土佐家の画家が旧プライス本の制作に関与したという観察を、暫定的ながら本稿の結論としたい。

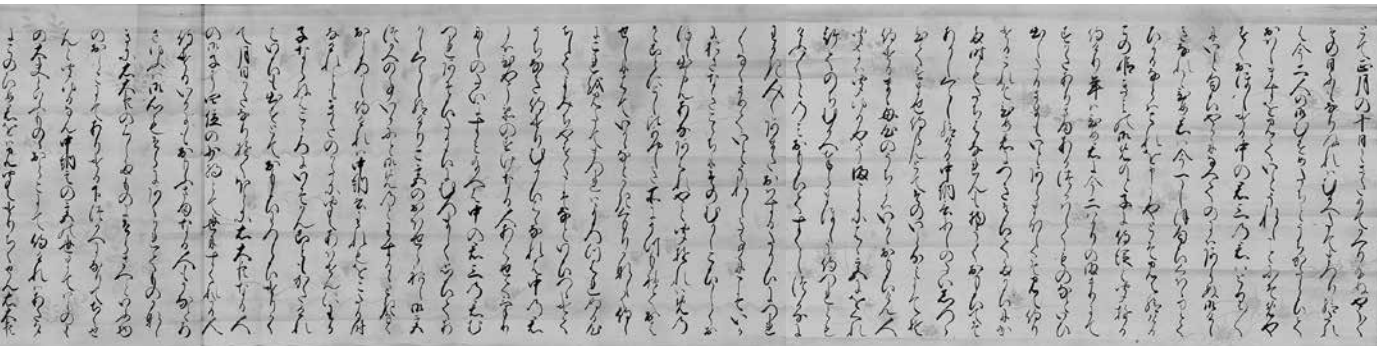
結語

近年の研究が明らかにしているように、十七世紀が実は豊かな絵巻作例が数多く生み出された時代であった。土佐家の正系に位置づけられる画家が手がけたことが推察される旧プライス本も、こうした、いわば「絵巻の時代」を形成する一作例として位置づけた上で、今後の研究が進むことを願う次第である。

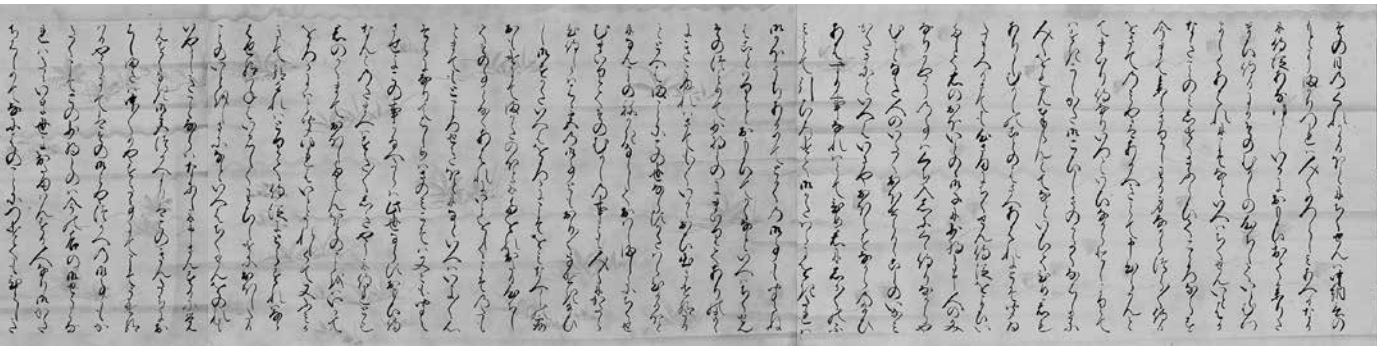
［図版出典］
図3・6　ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）



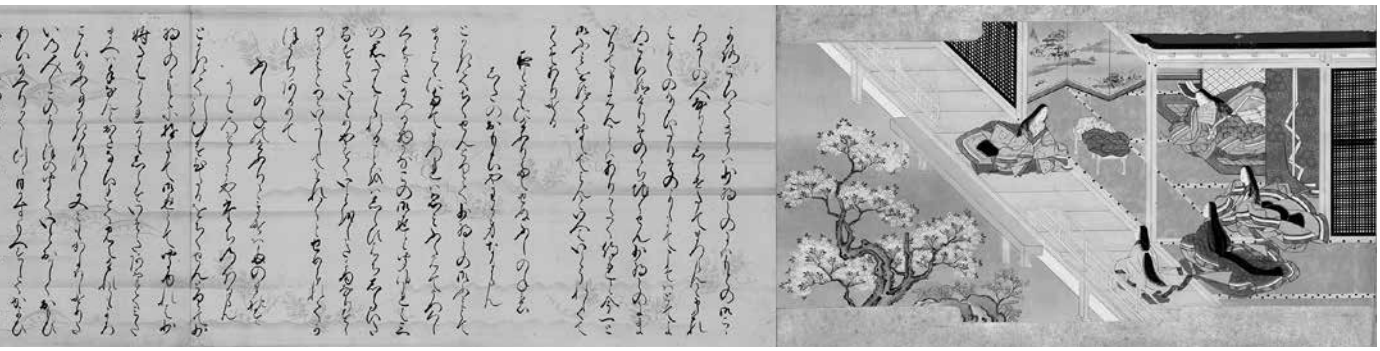
第三紙　第二紙　第一紙



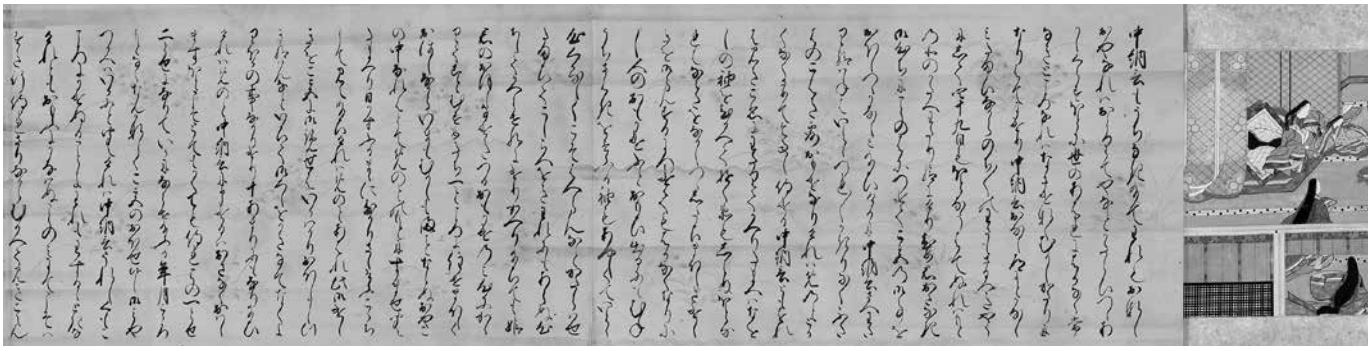
第七紙　第六紙



第一二紙　第一一紙

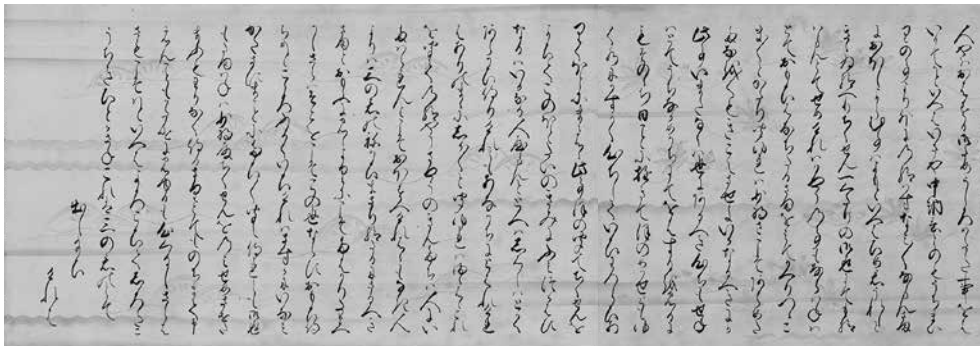


第一六紙　第一五紙

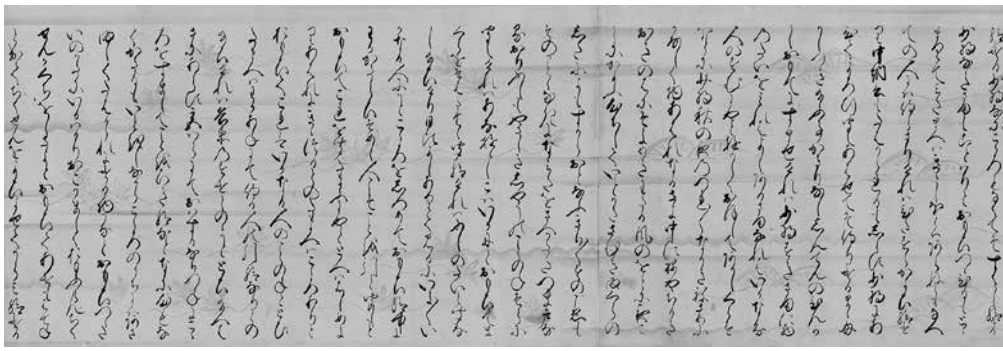


第五紙　第四紙

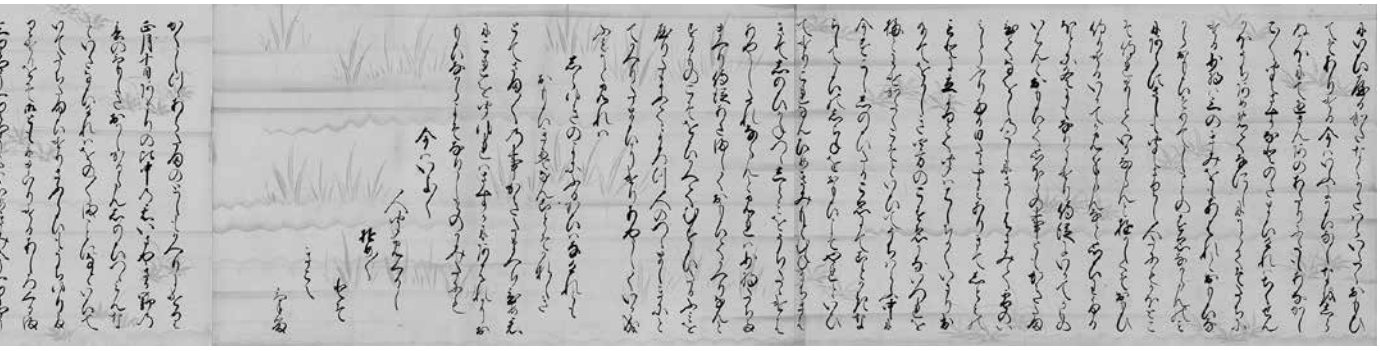
第一〇紙　第九紙　第八紙



第一四紙　第一三紙

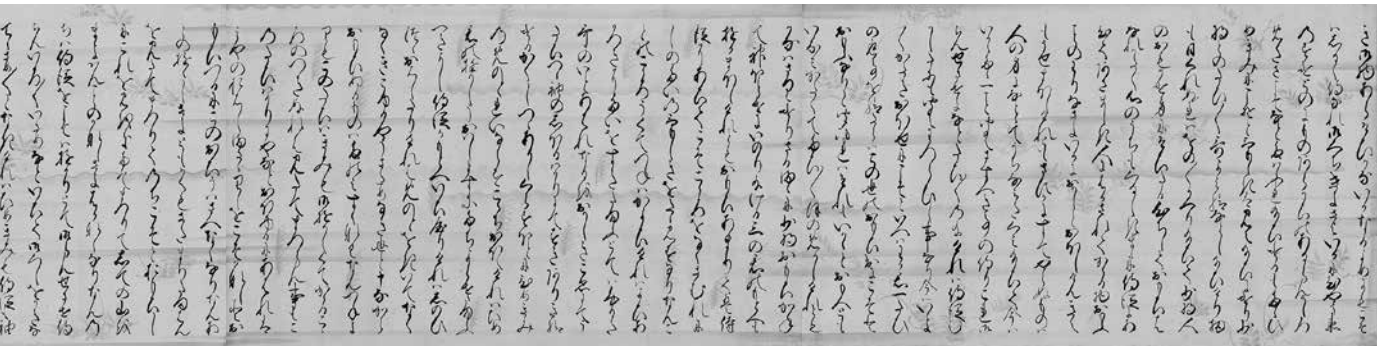


第一八紙　第一七紙

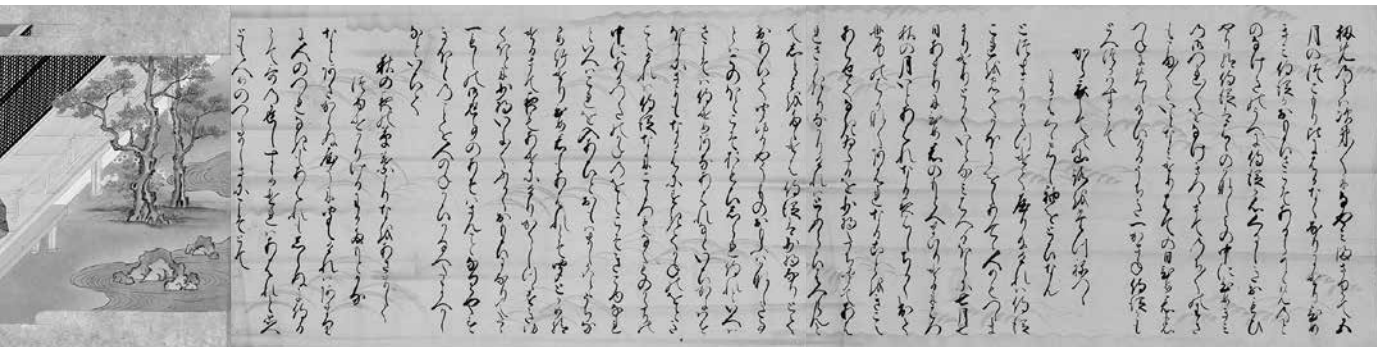


第二〇紙　第一九紙

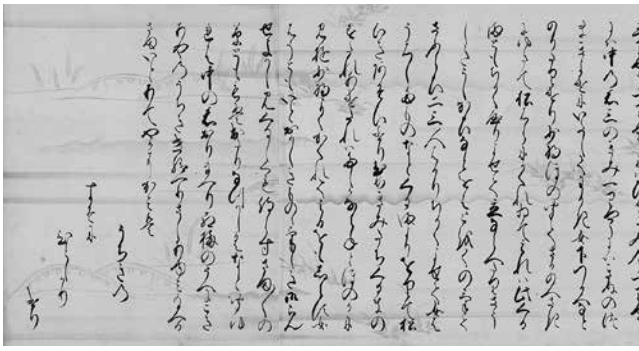
二四紙　第二三紙



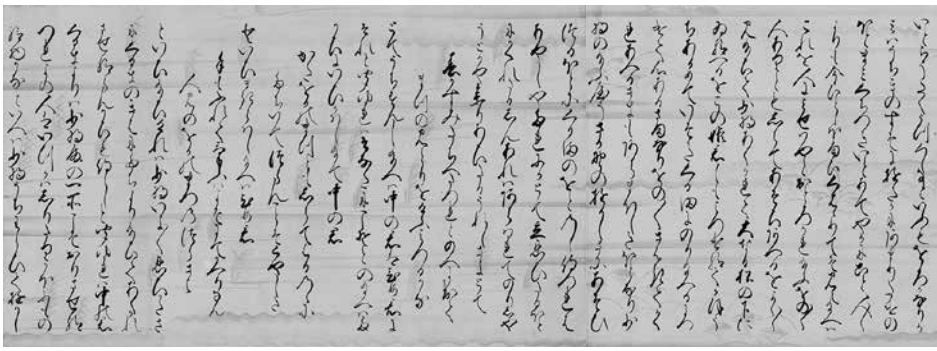
第二八紙　第二七紙



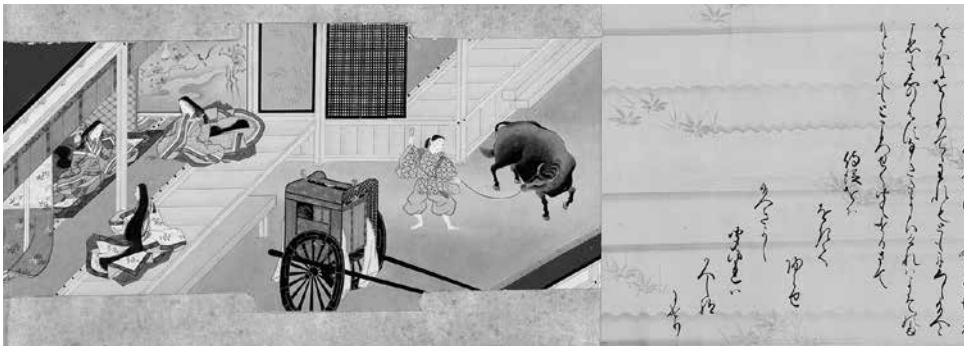
第三二紙　第三一紙



第二二紙　第二一紙



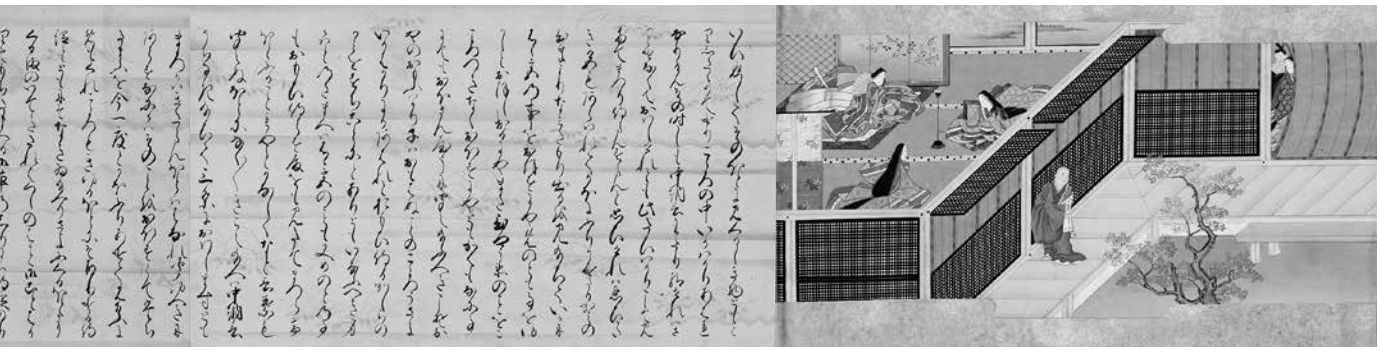
第二六紙　第二五紙



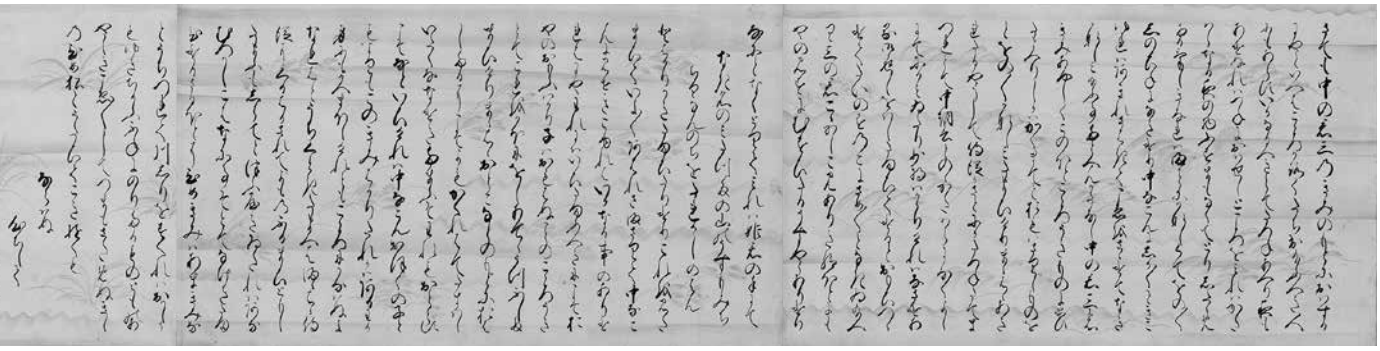
第三〇紙　第二九紙

第三四紙　第三三紙

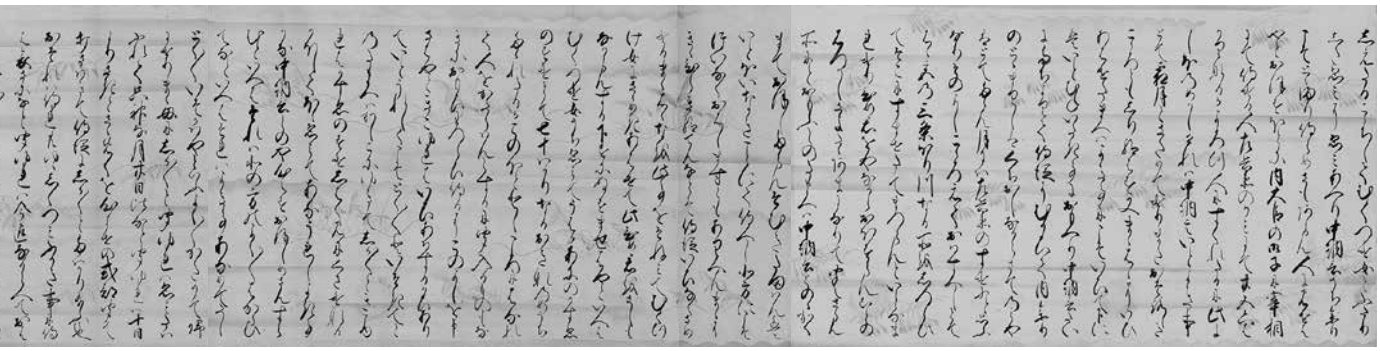
第二紙　第一紙



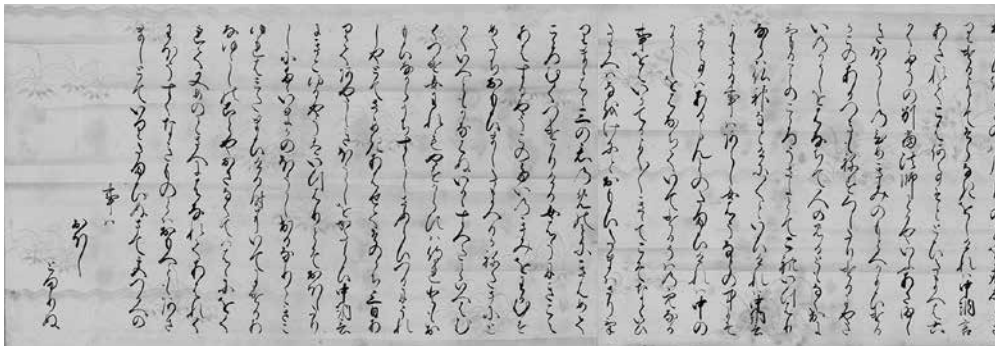
第六紙　第五紙



第一二紙　第一一紙　第一〇紙



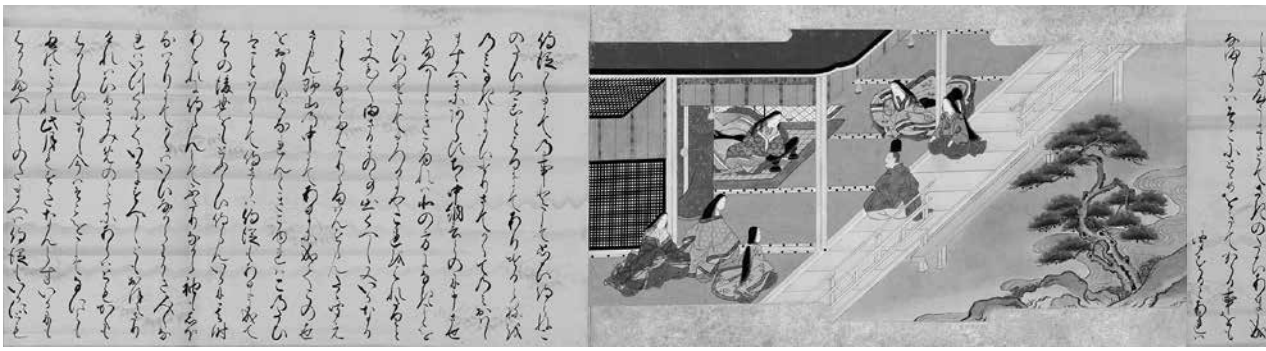
第一七紙　第一六紙　第一五紙



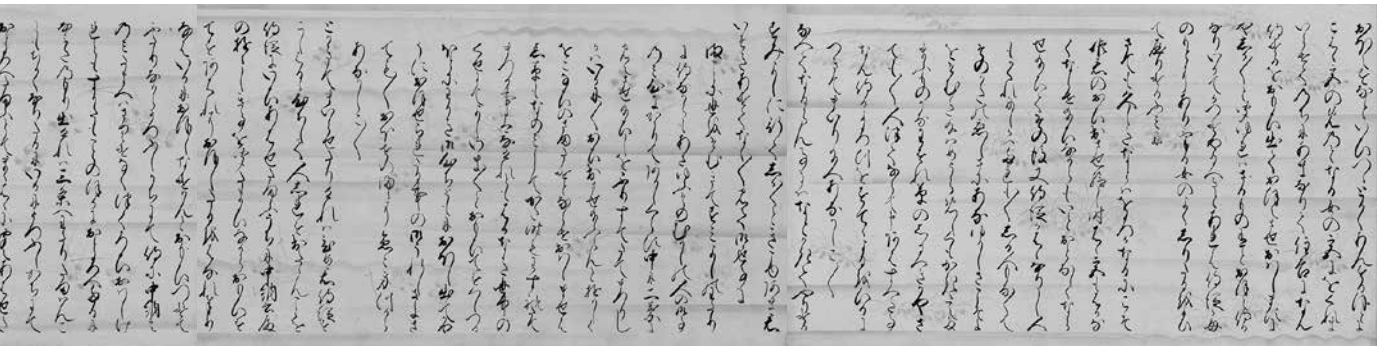
第四紙　第三紙

第九紙　第八紙　第七紙

第一四紙　第一三紙

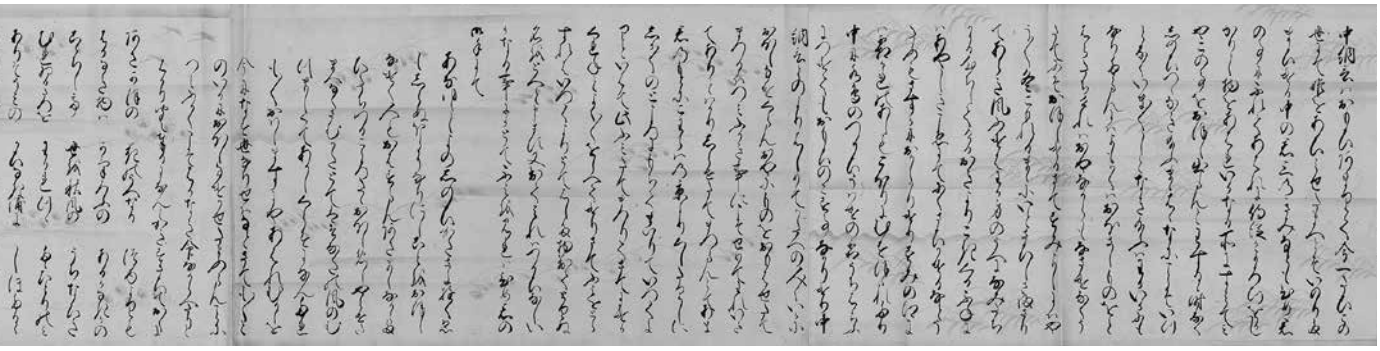


第一九紙　第一八紙



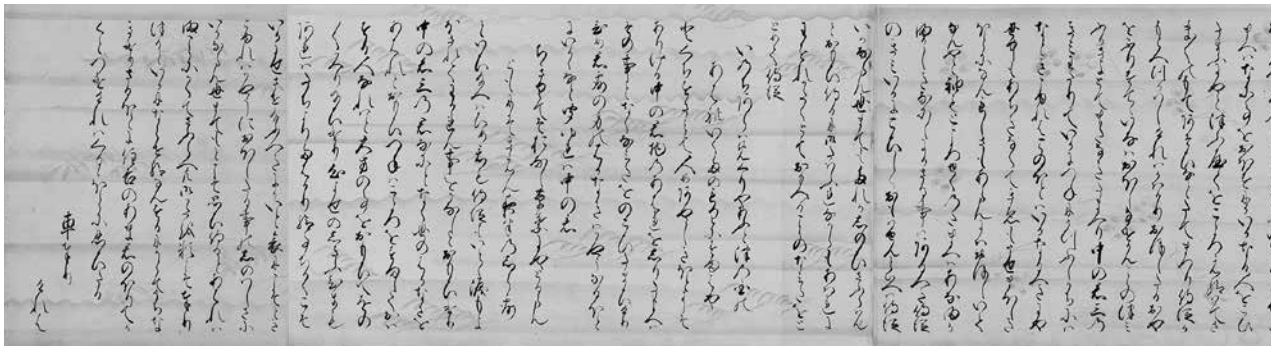
第二一紙　第二〇紙

第二六紙　二五紙



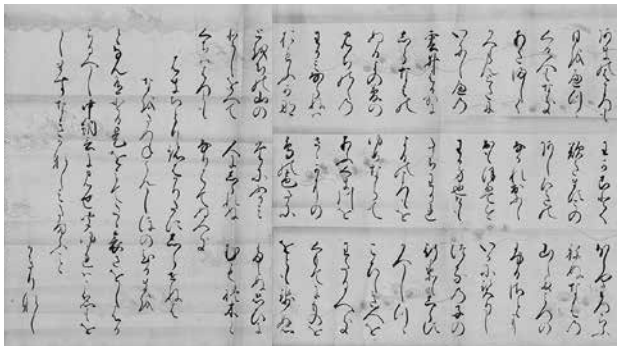
第三〇紙　第二九紙

第三四紙　第三三紙

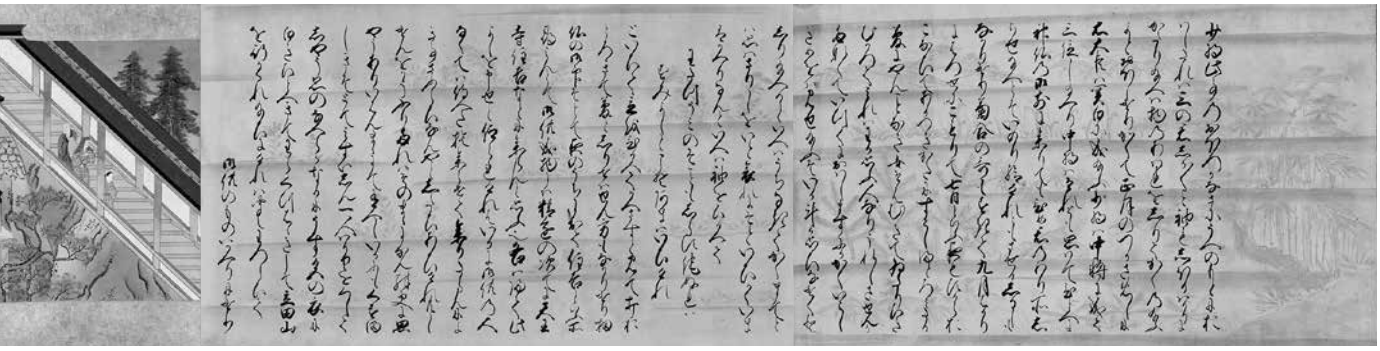


第二四紙　第二三紙　第二二紙

第二八紙　第二七紙

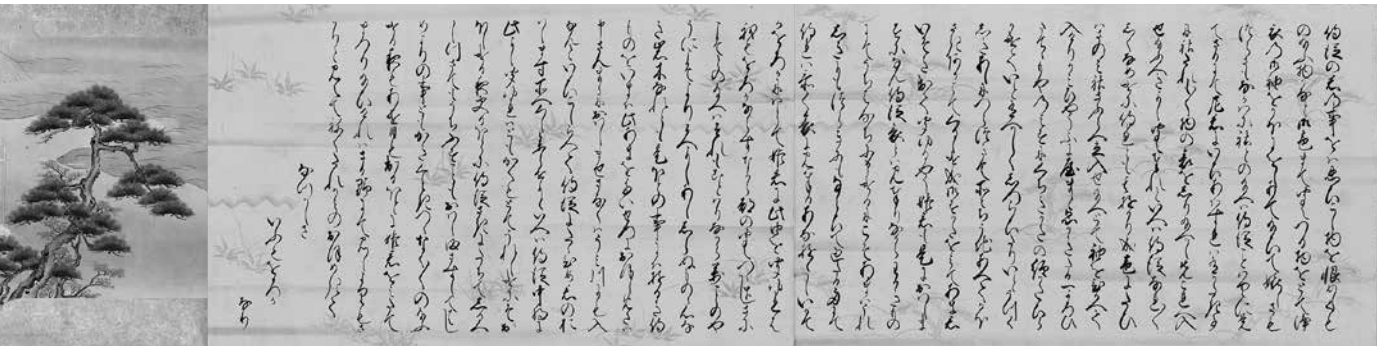


第三二紙　第三一紙



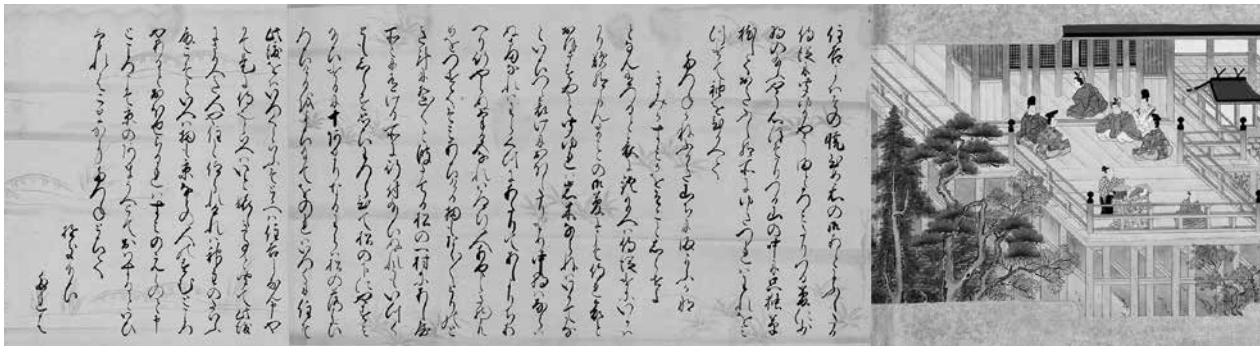
第二紙　第一紙

第七紙　第六紙



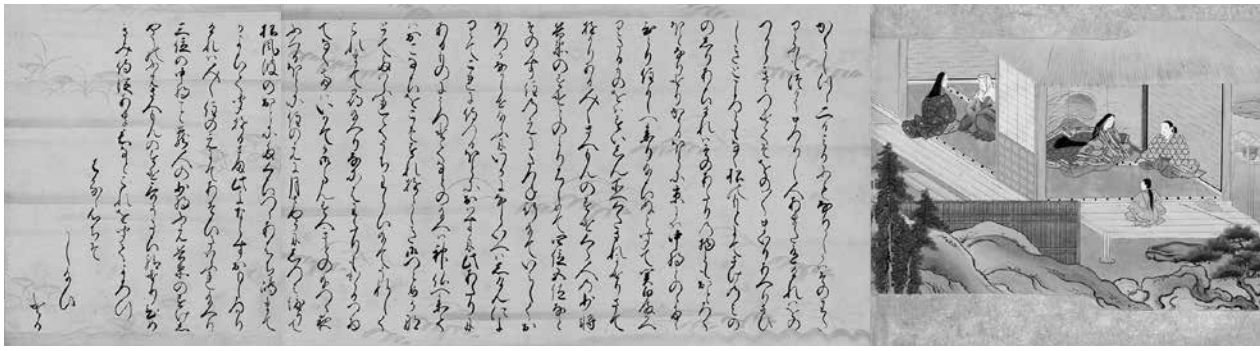
第一一紙　第一〇紙

第一六紙　第一五紙

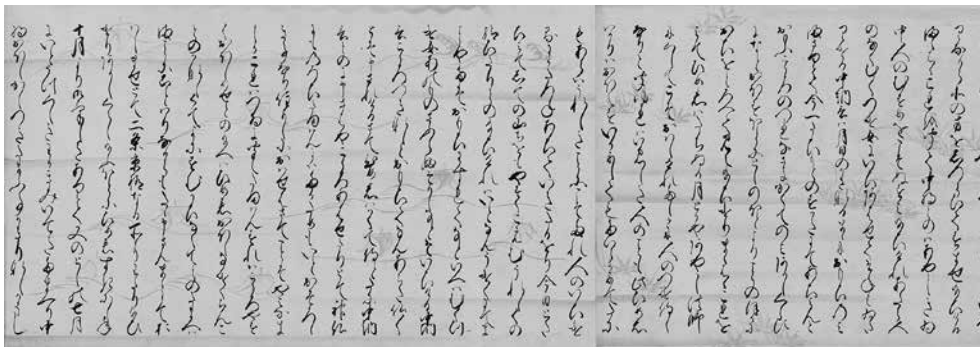


第五紙　第四紙　第三紙

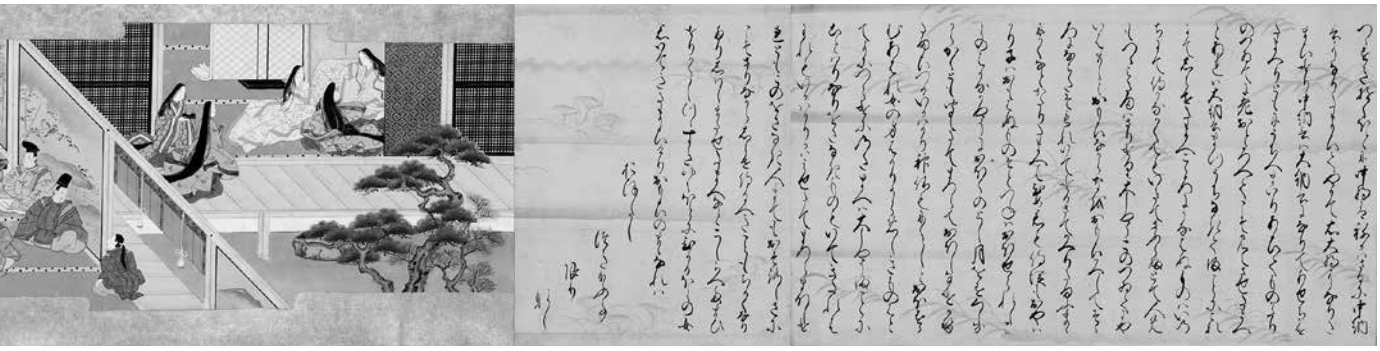
第九紙　第八紙



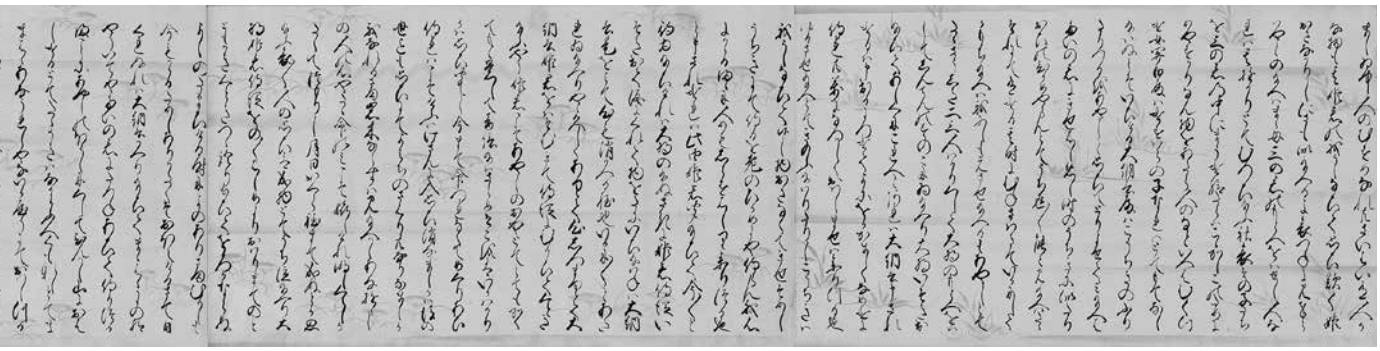
第一四紙　第一三紙　第一二紙



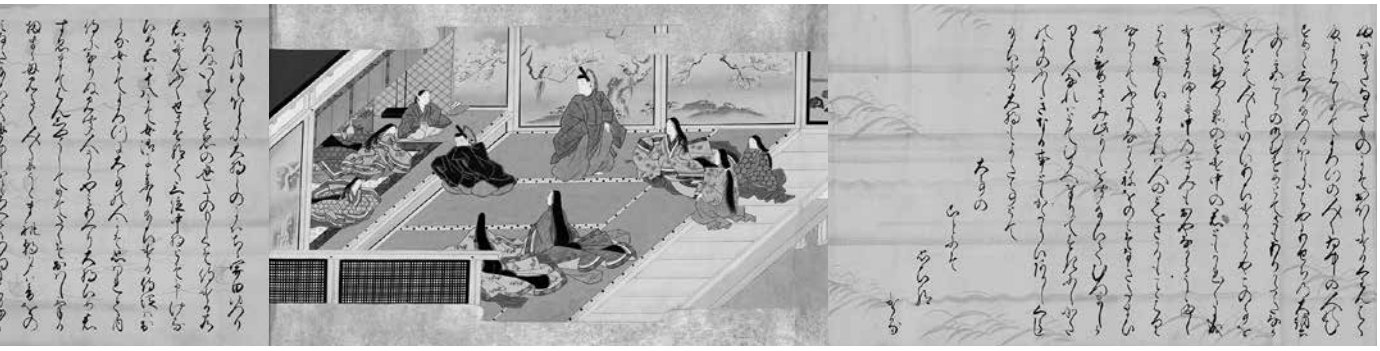
第一八紙　第一七紙



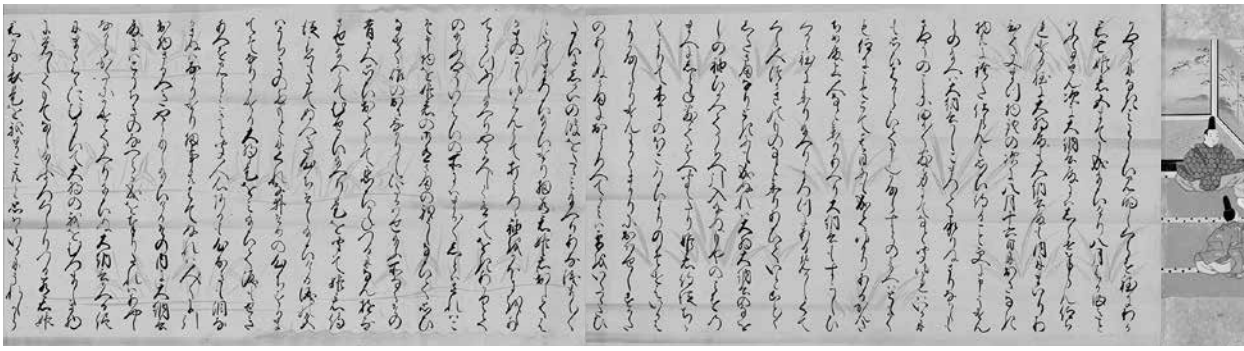
第二一紙　第二〇紙　第一九紙



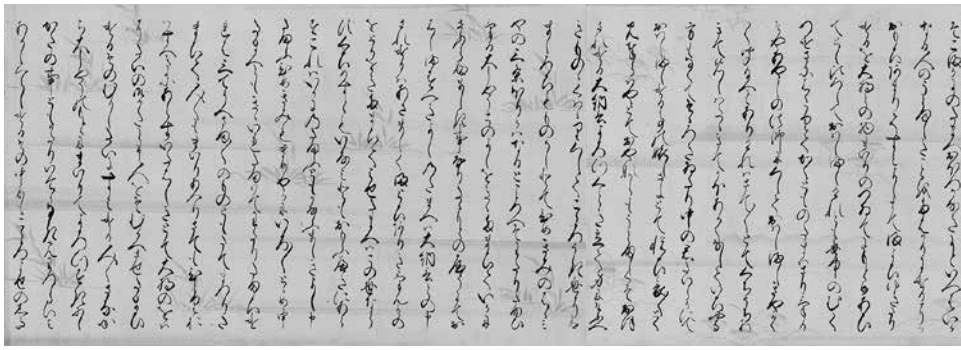
第二五紙　二四紙



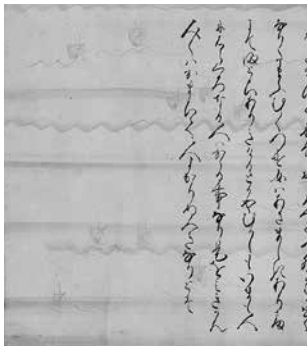
第二九紙　第二八紙



第二三紙　第二二紙



第二七紙　第二六紙



第三〇紙

「住吉物語絵巻」寸法

上巻		
縦		32.3
見返し		39.4
紙数	段	横
第１紙	詞１	47.2
第２紙		33.9
第３紙	絵１	50.4
第４紙	詞２	49.3
第５紙		49.1
第６紙		49.2
第７紙		49.5
第８紙		49.2
第９紙		24.4
第10紙	絵２	50.2
第11紙	詞３	48.6
第12紙		49.7
第13紙		49.6
第14紙		50.1
第15紙	絵３	50.5
第16紙	詞４	49.1
第17紙		49.4
第18紙		49.4
第19紙		48.7
第20紙		48.5
第21紙		48.2
第22紙		23.2
第23紙	絵４	45.9
第24紙		49.6
第25紙	詞５	48.0
第26紙		48.8
第27紙		48.4
第28紙		48.4
第29紙		48.7
第30紙	絵５	49.5
第31紙	詞６	47.5
第32紙		48.3
第33紙	絵６	50.1
第34紙	詞７	48.9
横（合計）		1599.5

中巻		
縦		32.3
見返し		39.4
紙数	段	横
第１紙	詞１	49.5
第２紙		49.5
第３紙		49.2
第４紙		49.2
第５紙	絵１	49.9
第６紙	詞２	49.4
第７紙		49.0
第８紙		23.5
第９紙	絵２	50.1
第10紙	詞３	49.8
第11紙		50.7
第12紙		23.2
第13紙	絵３	50.7
第14紙	詞４	48.8
第15紙		49.1
第16紙		49.5
第17紙		24.4
第18紙	絵４	50.5
第19紙	詞５	49.5
第20紙		49.5
第21紙		49.5
第22紙		49.6
第23紙		49.2
第24紙		23.8
第25紙	絵５	50.5
第26紙	詞６	50.2
第27紙		50.0
第28紙	絵６	50.3
第29紙	詞７	47.7
第30紙		49.8
第31紙		48.7
第32紙		22.8
第33紙	絵７	49.9
第34紙	詞８	31.8
横（合計）		1538.8

下巻		
縦		32.3
見返し		39.4
紙数	段	横
第１紙	詞１	49.0
第２紙		50.0
第３紙	絵１	49.6
第４紙	詞２	48.3
第５紙		24.2
第６紙	絵２	49.5
第７紙	詞３	48.5
第８紙		50.3
第９紙	絵３	50.5
第10紙	詞４	49.2
第11紙		48.8
第12紙	絵４	49.7
第13紙	詞５	49.5
第14紙		23.1
第15紙	絵５	50.7
第16紙	詞６	48.0
第17紙		48.8
第18紙		49.4
第19紙		48.8
第20紙		23.2
第21紙	絵６	49.7
第22紙	詞７	47.9
第23紙		48.7
第24紙		48.7
第25紙		48.9
第26紙		49.1
第27紙		48.5
第28紙		45.6
第29紙	絵７	49.8
第30紙	詞８	47.4
横（合計）		1393.4

（単位 cm）

「住吉物語絵巻」詞書翻刻

一、翻刻にあたっては原本にしたがい、基本的に改行や字配りもこれにもとづく。
一、当て字・誤字・脱字・桁字・仮名づかいは原本のとおりである。
一、漢字には新字体をもちい、変体仮名も現行の平仮名にあらためた。

【上巻】

詞1

むかし中納言にてさゑもんのかミかけた
る人はんへりけりうへ二人をかけてそかよ
ひたまひけるひとりはときめく諸大夫
のむすめそのはらに女きみ二人いてきた
まへりけりいまひとりはふるきみかとの御
むすめにておはしけるかいかなるすくせに
てこの中なこん夜な〳〵かよひたまひける
ほとにやかて人めもつゝますなりてすみわ
たりたまふけるかひかるほとのをんなきみ
いてきたまひけるおもひのまゝなれハおほ
しかしつきたまふ事かきりなけれハひめき
み日かすふるまゝにおひいてたまへりとし
月かさなりて八はかりになりたまひける」（第一紙）
としはゝミやれいならすなやミたまふ
けるか日をへておもくのミなりまさりたま
ひけれははゝミや中なこんにきこえたまひ
けるやうはわれはかなくなりなはこのお
さなきものゝためうしろめたうなんはへるへ
きわれなからんあとなりともなみ〳〵ならん
ふるまひせさせたまふないかにも〳〵みかと
にたてまつらせたまへことむすめたちに
おほし
をとすなと
なく〳〵
聞え
たまへ
は」（第二紙）

絵1（第三紙）

詞2

中納言もうちなき給てわれもおなし
おやなれハおとりてやなとかたらひつゝあ
かしくらすほとに世のあはれにはかなく常
なきところなれハなさけなくむかしかたりに
なりはてにけり中納言おなし道にとかなし
ミたまひなからのち〳〵のわさもさるへきやう
にして四十九日もほとなうはてぬれハもと
の北のかたへわたり給にけりひめ君おさなき
御心ちにことのはにつけてこ宮の御事を
おほしつゝかなしミ給ひけるに中納言さへわた
り給ハねはいとゝつれ〳〵かきりなくふた
はのこはき露おもけなりけれハめのととか
くなくさめてそ過し侍ける中納言ともすれ
はみきこゑにわたりてかへりたまへハなを
しの袖をひかへてゆくゑもしらぬほとな
れはなミたをなかしつゝしたひまほしきけし
きを御らんするにつけてもはかなくなりに
し人のおもかけふとおもひ出るにもむね
うちさはきをそふる袖もあやしくていとゝ」（第四紙）
心くるしくこそはへらんなとかたらハせ
たまひてこしらへをきわれにもあらぬ心
ちしてかへらせ給にけりかへり給ひても姫
君のおほしなけきつるおもかけのミ心にかゝ
りてことむすめたち一ところに住せまほしく
おほしなからいまもむかしもまことならぬおやこ
の中なれはとてめのとのもとにすませ聞え

たまへり日かすふるまゝにひかりさしそふこゝち
してみえ給ひけれハめのとあはれ此御けし
きをこ宮に御覧せはいかハかりおほしかしつ
き給ハんなといひて御くしをかきなてなくよ
りほかの事なかりけり十あまりにもなり給ひ
けれハめのと中納言に申けるハおさなくおハし
ますほとこそとてもかくても侍れこの一とせ
二とせになりていかにならせ給ふる年月こゝろ
もとなくなんかなしくこ宮のおほせ候し御ミや
つかへハいかにと聞えけれハ中納言うれしくもこ
ころにかけぬることよわれもわするゝときな
けれともおもふにかなハぬことのミにてこそハ
すき行侍れさりなからむかへてみきこえん」（第五紙）
とて正月の十日とさためてかへり給ぬやう〳〵
その日にもなりぬれハむかへたてまつり給たれ
は今二人の御むすめたちとうちかたらひて
おハしますをみていとうれしことにそめや
すくおほしける中の君三の君ハとり〳〵
にいと匂ひやかになへてのにハあらぬ御けし
きなれとひめ君ハ今一しほ匂ひくハゝりて
ひかるなとハこれを申にやとそみえ給ける
この姫きミの御めのと子に侍従と聞ゆる
侍けり年ハひめ君に今二ハかりのまさりにて
すかたありさまありつかハしくものなといひ
出したるさまもいとあらまほしくそみえ侍り
けるこれそひめ君につきそひてたかひにか
た時もたちはなれんも物うくおもひてそ
あかしくらし給ける中納言にしのたいしつら
ひてすませ侍らんとてそのいとなミにてそ
侍けるまゝ母心のうちにハいかゝおもひけん人
聞にハ聞ゆるやうまことには宮にをくれ
給てのちむかへ奉らまほしう侍つれとも
けふ〳〵とのミおもひてすくしつるに」（第六紙）
わかき人〳〵あまたおハするたかひにつれ
〳〵なくさめていとうれしき事にこそいか
におさなきこゝちにそのむかしこひしくお
ほし出らんあなあはれやと聞ゆれハめの
とことにとし比あやしき所にうつもれておは
せしにはていかゝなとかきくもりかなしく侍し
にこれをみたてまつれハよろつはれぬる心
ちしてよみちやすくこそなといひつゝけて
うちなき侍けりむかひはらなれは中の君
にハひやうゑのすけなる人あはせてけり
にしのたいにすミ給へは中の君三の君む
つれあそひたかひにむつましく思ひてあ
かしくらし給けりこ宮のおほせられし御宮
つかへの事いかにと御めのとわするゝときなく
おとろかし侍けれハ中納言われもをこたる時
なけれともきたのかたに聞えあハせんにわか
子ならねはこゝろにいそかんこともかたけれ
はいひも出すとておもひわつらひけりかく
て月日かさなりゆくほとに右大臣なる人
の御子に四位の少将とて世にすくれたる人」（第七紙）
侍けるいかにもおもふさまなる人もかなとあ
さゆふハ御心もそらにあくかれてものかなし
きに右大臣のはしたものにそらさへといふ物
のおとこにてありける下つかへになりてちくせ
んと聞ゆるなん中納言の宮の世まてハとのも
の大夫といふもの、おとこにて侍けれハあさ夕
にこのひめ君をハみ聞えけりちくせん右大臣
の家のきたのかたにて人のよしわろき事
かたるつゐてに中納言のミやハらのひめ君
こそおさなおひたちめてたくふたはのこは
きをみるこゝちせしかいかにおひ出給たらん
こは、宮のうせ給てのちハ四五年はみ侍ら
すといふを少将たち聞給ていとうれしき

ことを聞つるかなとおほしてわかさうしに
ちくせんをよひてミるらんやうにさもとあ
る人あまたあれとものうくのミしてす
くす中納言の宮ハらの姫君ハみしかとた
つねたまひけれハちくせんおとこにて侍しも
のこは、宮に侍しかハよくみたてまつり侍
し世にうつくしく中納言とのハミやつかへ」（第八紙）
をとの給へハうちかなハておほしなけくとそ
うけ給ハるといへハその人の事いひよりて文
なとつたへてんやとの給へハかなハんことハしらす御文
をもて参りてこそハみ侍らめと聞ゆれハよろ
こひて十月はかりにもみちかさねのうす
やうに
　初時雨けふふりそむるもみちはの
　いろのふかきをおもひしれとそ
かきてひきむすひてやり給へは」（第九紙）

絵2（第一〇紙）

詞3
その日のくれかゝるほとにちくせんハ中納言の
もとにまかりつれハ人〳〵めつらしミあへかなる
に侍従あなゆゝしいかにおもひ出て参りた
まひ侍るにかそのむかしの心ちしていとむつ
ましくあはれにこそなといへハちくせんいとはか
なきことのミしけくさふらひてこゝろならす
今まて参らさりしわか身なからつら〳〵侍る
をさてのミやはあるへきとて申ひらかんと
てまいり侍なりいつといひなからとしよりて
ハすきこしかた御こひしさのかたくなはしさに
人〳〵をもみ奉らんとてなといひてひめ君も
ありしむかしのことのはさへあはれにとそ聞ゐ
たまへるさても心さまにちくせん侍従をよひい
たして右のおほいとの、御子に少将と申人の文
なりかやうの事ハくち入しにくゝ侍りなからや
むことなき人のいたくおほせらるゝことのいなミ
かたさにといえはいまやおほえすなからの給ひ
あはする事なれハとてひめ君にしか〳〵のふ
ミとて引ひろけて御かたハらにをきたれハ」（第一一紙）
御かほうちあかめてとかくの御事も聞えね
はことハりとおもひてかくなといへハちくせん
そのつとめて少将とのにまいりてありのま、
にきこゆれハさても〳〵いか、おひ出させ給たる
ととへはまことにこの世ならすかたハらひかるほと
になんことのねかきならしておハしまし、にちくせ
むまいりてそのむかしの事とも人〳〵にかたら
ひ侍しかハは、宮の御事ともおり〳〵なけき給ひ
し御すかたいへはをろかにこそをミなへしの露
おもけにてまかきのほとにたをれ出たる心ちし
てその事となくあはれにいとをしくよそのたも
とまてもところせきほとになといへハいよ〳〵心
そらになりてはしめハさのミこそハ又さも聞え
させよこの事かなへたらハ此世ならすおもひ侍
なんとのたまへハすき〳〵しきやうに侍れとも
君のかくまておほしたえんほとのことをハいかて
をろかにハと聞ゆれハいとうれしくて又ふミか
きて給けれハとりて侍従にとらすれハなら
はせ給ハねはいみしくわひしけにおほしたる
ことのいとをしさになといへはちくせんをのれも」（第一二紙）
いやしきことならハなにしに申さんするに覚
えすくなき御宮つかへよりはこのきんたちにお
はしまさハ中〳〵めやすき事にてこそうけ給
ハるやうにてはその御ミやつかへの御事もか
たくこそこの少将とのハ今の后の御せうとな
れハたゝいま世に出たまハんする人なり御かた
ちはしめてなにはのことにつけてもひとしき

人やハおはする御ためうしろめたき事をは
いかてかといへはいさや中納言とのもうちまい
りの事より外にの給はすなミ〳〵ならんさま
におほしよらむ事ハよもといへはひめ君うれしと
き、ゐ給へりちくせん一くたりの御返にても給
ハらんとてせめけれハかやうの事もならハねハ
とておもひはなちたるさまをミてかへりつゝこ
ま〳〵とかたり聞ゆれハ少将さこそあらめた
たなを〳〵もきこえさせよいかなるへきにか
此事いまたなくハ世にあるへき心ちもせね
ハとてうちなかめかちにてをはするをみるに
もその、ち日ことにゆきてほのめかせともゆ
く水にかすかく心ちしていひわつらひあ」（第一三紙）
りくほとにま、は、此事ほの聞てちくせんを
よひてこのほとたいのきみにふミつかはす
なるはいかなる人やらんととへハしはしハとかく
あらかひ侍りけれともあなかちにとはれけれ
はありのま、にしか〳〵と聞ゆれハま、は、これ
を聞ての給やうさやうのきんたちハ人にい
たハられんとこそおほすへけれは、もなき人
よりハ三の君のねかひまさり給たるにさるへき
さまとおもふにみ、よりにこそたはかりたまへ
かしさらハそこをこそこの世ならすおもひ侍
らめとこ、ろふかくいひけれハさすかにいなミ
かたさにまことにたひ〳〵聞え侍れとも御返
もたまハねハ少将殿ちくせんをのミせめさせた
まふもわりなく侍るさりとてものちまて申
えんことかたけにみゆるも心くるしさらは
さもこそハといへはよろこひてしろきこ
うちきひとかさねこれは三の君のとて
出し給ひ
けれは」（第一四紙）

絵3（第一五紙）

詞4

よろこひてさらハ少将とのにハもとの御こ、
ろさしの人なりとしらせたてまつらんと申けれ
はよくの給ひたりそのよしにてこそハとてよ
ろこひ給けりそのゝちちくせん少将とのにま
いりて申えんことハありかたく侍れと今一と
御ふミを給て聞えてミんといへはいとうれしくて
かくそありける
夜とともにけふりたえせぬふしのねの
したのおもひやわか身なるらん
とかきてちくせんとりて少将との御ふミとて
ま、は、にたてまつれハゐミふくみてうつくし
くもかき給へる物かなこの御返と聞ゆれは三
の君たはかられることをハしらすはちしらひた
るすかたいとめやすくいとをしきさまなりす、
りかミとりいたしてそれ〳〵とせめられてか
ほうちあかめて
ふしのねのけふりときけハたのまれす
うはのそらにやたちのほるらん
とかきて引むすひたるをちくせんとりて少」（第一六紙）
将との、もとにゆきて御返とて聞ゆれは少
将たはかられるもしらすいそきあけてミた
まへハ手なんとおさなひれてみえけれともよろ
こひ給ふ事かきりなし又さもかよハしけりた
いの人〳〵このよしほの聞ていとおかしくおもひ
あひ給へりかくしつゝ日かすもへすしてかよひ
給ける少将なにこ、ろもなくてそすくし給ける
少将なきさまもことハりとおもひつゝひるもと、
まりてミたまへハき、しほとハあらねともなへ
ての人にハ侍らさりけれハひたすらかよひ給け
り中納言もたはかられるもしらす少将にあ

ひてよろつ聞えあはせてそ侍りけるま、母
かしつき給ふ事かきりなししんてんのひんか
しおもてにすませけれハ少将すきさまに西
のたいをミれはよしあるさまなれはいかなる
人のすむにやとゆかしくおほしてあかしくらす
ほとに少将秋の夜のつれ〳〵なかきねさめに
かなしく物あはれなるさよ中にねやちかき
おきのはにそよめきわたる風のをとに夜こ
とにかよふ心ちしていとかたさむきまくらの」（第一七紙）
したによもすからおとなふきり〳〵すのこゑも
そのこと、なきになミたをさへかたきつま戸な
るおりふしもやさしきしやうのことのねそらに
聞えけれハあなゆ、しこハいかにとおもひてま
くらをそはたて、聞給けれハにしのたいと聞な
し給ひけり日比よしありてみるにいよ〳〵い
かなる人にかとこ、ろをしつめておもひ給中に
わかかたらひそめし人こそことを引と聞しかと
おもひてこれを聞たまふにやととへハはしめよ
りあはれにき、つるとのたまへハこ、ろありと
おもひてこれはいかなる人のことのねととひ
たまへハわかあねにて侍る人の引給なりとの
給ひけれハ兵衛のすけとの、かととひ給へは
さにあらす宮ハらにておハするなりつねにこ、
ろをすましてことをひき給なとなに心もな
くかたるもいとをしなからこ、ろのうちにハあさ
ましくたはかられにける物かなとおもひつ、た
いのかたにいかハかりおこかましくおもふらんちく
せんかくちをしさよとおもひてあけもはてね
と出てちくせんをよひよせてうらミ給ける」（第一八紙）
にいひやるかたなくかたハらいたくおもひ
てそありける今はいふにかひなしなをしら
ぬかほにて過さんあのあたりにたもあなかし
こ〳〵聞えさすなとのたまひけれハちくせん
かほうちあめめてなにしにかとてそたちに
ける少将ハ三のきみをもあはれとおもひな
からおもひそめてしことのすゑなからんのミ
にあらすさしも聞えさりし人たにもかほとこ
そ侍れましていかならんとゆかしくそおもひ
侍りけるいかてかみ奉らんなと思ひわたる
ほとに冬にもなりにけり侍従にいかてかもの
いはんとおもひて思ほとの事ともかきたま
ひてなをしのこしにさしはさみて雪のい
ミしうふりたる日たゝすミありきてしとミの
もとに立よりて聞ハはしちかくいさり出
給てをかしき四方のこすゑかないつれを
梅とわけかたくこそといひてうちハらふ中に
今すこししのひたるこゑにてことかきな
らしてかひのしらねをおもひこそやれといひ
てけりこれなんひめきみもとむねうちさは」（第一九紙）
きてしのひかねつゝしとミをうちたゝけは
あやしたれならんとみれハ少将たちた
まへり侍従あさましくおもひてかへりなんと
するものこそをひかへてむすひたるふミを
やりたまふてよろつ人のつゝましきにと
てかへりたまひにけりあやしくいか成
ふミかとみれハ
しらゆきのよにふるかひハなけれとも
おもひきえなんことそかなしき
とてさま〳〵の事かきたまへりひめ君
にこれを聞ゆれハさすかにあはれにお
もひなからよそなりしそのかみたにも
今ハいよ〳〵
人聞みくるし
ゆめ〳〵
とそ
きこえ

ける」（第二〇紙）

かくしつゝあらたまのとしもかへりにけり
正月十日あまりの比中の君いさやさか野の
春のけしきおかしかるらんしのひつゝミんな
といさなひけれハをの〳〵まことになといひて
いてたちたまひけりさふらひもうちゆりた
りけるをそ御ともにまいりけるあしろくるま
三りやう一りやうにハひめきみ今一りやう
にハ中の君三のきみ一りやうにハきぬのつ
まきよけにいたしてわかき女下つかへなと
のりたりけり少将ほの聞てさかのへさき
にゆきて松はらにかくれゐてミれハ此くる
まともちかくやりよせて立ならへたりさう
しきうしかひなとをはとをくののけて
さふらひ二三人はかりちかくよせて女は
うはしたものなとくるまよりをりて松
ひきあそひけりひめきみたちくるまの
すたれあけたれハたしかならねとほのかに
見ゆ少将よくかくれてミるをもしらす女
はうともいとおかしきもの、けしき御らん」（第二一紙）
せよかし見くるしくも侍らすさま〳〵の
草とももえ出たりなつかしくなと聞ゆ
れは中の君おり給へり紅梅のうへにこき
あやのうちきき給へりさしあゆミ給へる
さまいとあてやかにかミは
うちきの
すそに
ひとしかり
けり」（第二二紙）

絵4（第二三、二四紙）

詞5

次に三の君おり給へり花山吹のうへに
もよきのうちきなりいかめしきさまハ今すこ
しまさりてそ見え給へるひめ君ハとみにも
おり給はぬをいかにとせめけれハ侍従さしよ
りていかに人をハおろしまいらせてと申けれ
はおり給へり桜かさねの御そにくれなゐのひ
とへはかまふミしたささしあゆミ給へるすかた
いとらうたくうつくしなといふもをろかなりか
ミハうちきのすそにゆたかにあまりたけの
ほとまミくちつきいとあてやかにこと人〳〵
よりも今ひとしほ匂ひくはゝりてそみえ給へハ
これを人にミせハやとおとろかれ給ふをの〳〵
人ありともしらてあそひあへるをよく〳〵
見給ひて少将あくかれて大なる松の下に
ゐ給へるをこの姫君しもミつけ給てかほう
ちあかめていそきくるまにのり給へるにつ
けて心あるさまなりをの〳〵さはきてかく
れあへるさまもあらまほしきほとなり少
将の給ふやうさか野のゆかしさにあそひ」（第二五紙）
つるほとにくるまのをとのし侍つれは
あやしやたれにかとて立忍ひたるほと
にかくれたるしんあれハあらハれてのりしや
うとかや参りあひたるうれしさよとて
春かすみたちへたつれとのへに出て
まつのみとりをけふみつるかな
とてうちすんし給へハ中の君はひめ君に
それと聞ゆれハそなたにこそとの給へハた
かひにいひかハし給て中の君
かたをかのまつともしらてはるの、に
たちいてつらんことそくやしき
といひまきらハし給へハひめ君
手もふれてけふハよそにてかへりなん

人みのをかのまつのつらさよ
といひ給ひけれハ少将いよ〳〵忍ひかたさ
にくるまのきはにたちより給ひてあくかれ
させ給らんかひも侍らしと聞ゆれハ中の君
くるまよりハ少将殿の一所こそおりさせ給
つれよの人はいつかハしりたりかほにもの
給物かなといへハ少将うちわらひてゆかし」（第二六紙）
き御物あらそひかないかなるよめにもこそ
ハしるく侍なれ御くちきよさよいかにひやう衛
のすけとのにものあらかひのあるらんうしろ
めたさこそなとたハふれ給ひけるもたゝひ
めきみにこそとけしきはみえ給ひにけり少
将とのたひ〳〵哥よミ給なとし給ひけり物
も日くれぬれハをの〳〵かへり給ひて少将人
のおもかけ身にそひたる心ちしておもひは
なれかたく心のうちもくるしきまゝに侍従にあ
ひてあさましき人にはかされてかゝる物おもふ
ことのわりなさよいかにおかしとおほしけんきえ
もうせまほしけれともさすかにすてやらぬものハ
人の身になとゝてうちなミたくミ給ひて今ハ
いかゝたゝ一こと聞えさすへき事の侍りこれ御
らんせさせよなとたひ〳〵の給けれハ侍従む
かしたにも聞えわつらひし事なり今ハいよ
〳〵かたきおほせにこそといへハわか君一たひ
の返事を給たらハこの世のおもひ出にこそと
おもふなりと聞ゆれハそれもいかゝとおもへとも
いなミかたくてたひ〳〵ほのめかしけれとも」（第二七紙）
かなハさりけりさるまゝに少将おもひかね
て神ほとけにいのり給ける三の君のもとへも
ゆかまほしけれともおもひあまりては侍
従にあひてこそこゝろをなくさむれに
しのたいのけしきをたゝみすなりなんこ
とのこゝろうくてつねハかよひけれハよひあ
かつきにたいをすきたまふとてハふるき
哥のいとあはれなるをおかしきこゑにてう
たひつゝ袖のしほるハかりにてすきありき給
けるかくしつゝあかしくらすほとにひめきみ
のめのとれいならすこゝちおほえけれハひめ
君のゆかしうおハしますにたちよらせたまふ
へきよし侍従かもとへいひやりけれハしのひ
つゝおはしたりけれはめのとをきいてなく
なくきこゆるやうさためなき世と申なから
おもひぬるものハたのミすくなくなんつねよ
りもこのたひハきみも御ゆかしくてかゝるこゝ
ろのつきぬれは見たてまつらん事もこ
のたひハかりにやなとおほゆるにあはれは
ミやのおはしまさゝりしをこそかなしとお」（第二八紙）
もひつるにこのおひうハさへなくなりなんあ
とのゆゝしさよともかくもさたまりたまはん
をみたてまつりてのちこそとおもひし
にこれをみをきたてまつりてしての山を
まよハんことのかなしさよはかなくなりなんの
ちハ侍従をこそハゆかりとて御らんせさせ侍
らんいろ〳〵いさめなといひて御くしをかきな
てゝさめ〳〵となきけれハひめきみも侍従も袖
をかほにをしあてゝわれもともにくし給へと
こゑもしのはすなきたまひけれハよそのた
もとまてもところせく聞えけるさて
侍従をハ
をきて
帰らせ
給へきよし
聞ゆれハ
かへし給
にけり」（第二九紙）

絵5（第三〇紙）

詞6

扨めのとハ次第〳〵になやミまさりて五
月のつこもり比にはかなくなりにけりひめ
きミ侍従かおもひさこそあるらめとめのと
のなけきのうへに侍従か心くるしきおもひ
やり給侍従ははゝのかなしミの中にひめきミ
の御つれ〳〵をなけきつゝさてのち〳〵のわさ
もこま〳〵といとなミけりはての日ひめ君の
つねにめし給ひけるうちき一かさね侍従かも
とへつかハすとて
　から衣しての山路をたつねつゝ
　わかはくゝみし袖をとひなん
とつまにかきつけてやり給けれハ侍従
これをみてかほにをしあてゝ人めもつゝま
さりけりとかくいとなミはへるほとに七月七
日あまりにひめ君のもとへまいりけるにはつ
秋の月いとあはれなる夜はしちかく出て
世中のはかなくあはれなることをきこえ
あはせてなきゐたるを少将たち聞てあは
れさかきりなかりけれハとふらひはへらんと」（第三一紙）
てしとミをたゝけは侍従は少将なりとて
出あひて聞ゆるやうものおもふハかなしき事
とハこのほとこそおもひしられ侍れといへハ
さこそハ侍けめあなあはれなといひかよハす
ほとにさよもなかはにすきてかねのをとき
こえけれハ侍従なにこゝろもなくものかたりの
中にあかつきのかねのをとこそきこゆなれ
といへハこれを入あひとおもハましかハとうちな
かめ給けりひめきみもあはれとそ聞とかめ給
けるさて夜もあけにけりかくしつゝすきゆ
くほとに少将いよ〳〵ふかくおもひになりてたゝ
一もしの御返事のあそハさんことなりやす
きほとのことを人のねかひかなへたまへかし
なといひて
　秋の夜の草葉よりなをあさましく
　つゆけかりけるわかたもとかな
なとあさからぬやうに聞えけれハあまり
に人のつれなきもあはれもしらぬに侍る
とて哥の返しすゝめけれハあはれと思へ
とも人めのつゝましさにこそとて」（第三二紙）

絵6（第三三紙）

詞7

　あさゆふに風をとつるゝ草葉より
　つゆのこほるゝほとをみせはや
とかきてうち置給ふを侍従とりて
　ゆかりまて袖こそぬるれむさしの、
　つゆけき中にいりそめしより
と書そへてやりけれハ少将うちみて嬉しさにも
むねさハきて一言はの御返り事に世中のそむ
きかたく侍従の心のありかたさよとて
　むさし野のゆかりのくさの露はかり
　わかむらさきのこゝろありせは
なといひ返しけるかくしつゝおほくの月日かさな
るまゝにいよ〳〵思ひ増りて世中をもすさ
み宮つかへをも忘れて心のまゝ成事ならハき
えもうせまほしきほとなりけれハ三のきみな
にこゝろなく
　たまさかにみちくるしほの程もなく
　たちかへりなんことをしそおもふ
としたにほのめかしたまふも
　すてかたくて」（第三四紙）

【中巻】

詞書1

少将のたまふやうなにとなく世中の心
うくのミ侍れハふかき山にとおもひたつに
そのときおほし出なんやとのたまへハ三の君
いかになにゆへにさる事ハ侍るへきたまさか
にまちつけ侍るたにもこゝろうくこそま
していかにあはれにかとてうちなきたまへ
はあはれにてまことやあらまし事そと
てとかくあかしていてさまにたいにやす
らひて
君かあたり今そ過行いてゝみよ
こひする人のなれるすかたを
とおかしきこゑしてうたひけれハ侍従き
きとかめてまとをおしあけていかにといへハ
少将世の中のうさまさりゆけハふかき山に
もなとおもひとりてなといひたまへハ侍従」（第一紙）
いてや一ねんすいきとこそうけたまは
れましてむさし野の草のゆかりなれハ
おなしはちすもこそといへはうれしき善
知識とかやにこそとたハふるゝもわすれかた
くてかくこそわらひたまふともあハれとお
ほしあハする事もありなんものをといひつ
つあかしくらすほとに九月にもなりぬれは
中納言北のかたにのたまふやうゆくすゑハし
らす二人のきみはありつきぬこのたいの方
をこたしのこせちにまいらせはやとおもふに
うちあはぬことのこゝろうさよとてなけき
たまへハわか子ともにおもひまし給へるをね
たしとおもひなからいふやう中〳〵おほえすく
なき宮つかへよりもときめくかんたちめなと
にあはせたまへかしなといへハなミ〳〵の人に
はミせんこともあたらしさになとのたまへハ
まゝは、ともかくもはからひにてこそといひ
なからいかにしてかあやしき名をたてゝお
もひうとませんとあんしけり中納言霜月
の事なれハいてたちをのミいとなまれけれ」（第二紙）
ハまゝは、ともにいとなむけしきにてし
たには人わらハれになすよしもかなとおも
ひ人しつかなるときに中納言にきこゆる
やうきゝなから申さゝらんハうしろめたきこ
となれハ申なりこのたいの御方をハわかむ
すめたちにもすくれておはせよかしとこそ
おもひ侍にこの八月よりの事を露しらさ
りけるよとてそらなきをしけれハ中納言
あきれてこは何事そととひたまへは六
かくたうの別当法師とかやいふあさまし
きほうしのひめきみのもとへかよひける
かこのあかつきもねすくしたりけるにやた
いのかうしをはなちて人のみるともなく出に
けることのこゝろうさよとてこれいつはり
ならハ仏神なとけに〳〵といひけれハ中納言
よもさる事ハあらし女はうなとの中にそ
さる事ハあるらんとのたまひけれハ中の
かうしをはなちていてけるうハの空なる
事をはいかてかよく〳〵きゝてこそなといひ
たまへハなをけにとおもひたまハさりけ」（第三紙）
りまゝは、三の君のめのとにきはめて
こゝろむくつけかりける女はうにきこえ
あはするやうこのたいのきみをわかむす
めたちおもひましたまへるかねたさにと
かくいへともかなはぬいかゝすへきといへはむ
くつけ女われもやすからすハ侍れともお
もひなからうちすくしさふらひつるにうれ
しやとてさゝめきあはせてそのゝち三日あ
りてあやしきほうしをかたらひ中納言

にきこゆるやうはいつはりとそおほしたり
しにた、いまかのほうし出るなりときこ
ゆれはミたまひける時にいてにけるあ
なゆ、しのことやおさなくてハは、にをく
れて又めのとさへにはなれてあはれく
わほうすくなきものとハおもへともあさ
ましとていりたまひぬさて宮つかへの
事ハ
おほし
とまりぬ」（第四紙）

絵1（第五紙）

詞2

いひ返してそのほとにみくるしき物ともと
りした、めてけりこ、ろの中いかハかりあはれ
なりけんその時しも中納言わたり給けれハさ
りけなくておハしけれとも此たひハかりこそみ
たてまつり侍らんすらんと思ひけれハ忍ひかた
き色もあらハれてかほにふりかけたるかミの
ひまよりなミたもり出るをみ給ひていかに
は、宮の事をおほすにやめのとも事をゆ
かしとおほし出るにやまたひやう衛のことをこ
ころつきなくおほすにやともかくもなに事
にてもおほさんやうに聞え給ふへきこそお
やのおもふハかり子ハおもはぬことのこ、ろうさよ
いかはかりにかあはれとおもひ侍るかしらの
かミをすちことにとありともいなふへき身
かハとのたまへハは、宮のことも又めのとの事
もおもひ侍らす殿をもみたてまつらて
ほとふることもやとかなしくなと言葉も
聞えぬほとになく〳〵きこえ給へハ中納言
うちなき給ひて三条におハしますとも」（第六紙）

まろかハきたらんほとハはなれ聞ゆへきに
あらすなにかハそのことをおほすとてたち
たまふを今一度とかほふりあけてみ給ふに
めもくれこ、ろもきゆるほとにそありける侍
従とともにそなきゐ給へりさよふくるほとに
くるまのいてきたれはくしのはこと御ことはか
りそもちたまへる御車のしりにハ侍従のり
たり比ハ長月廿日あまりのことなれハ有明の月
かけもあはれなるに出てゆき給ひけんこ、
ろのうちいかハかりかなしかりけんあらしはけ
しきそらにかすたえぬ音を鳴わたる雁も
おりしりかほに聞ゆ雲まを出る月のつね
よりもわれをとふらふこ、ちそしけるさてあ
ま君のもとへ行てかきくときこま〳〵とかた
りけれハまことにおほしたつも御ことはりに
こそむかしもいまもまことならぬおやこの有
さまのゆ、しさよま、は、なからもいつくを
にくしとかみたまふらんあさましか、るうき
世なれハおもひすて侍る物をとてすミそ
めの袖をしほるはかりにてそありけるか夜の」（第七紙）
うちによとにつきてけりまた少将ハその
夜たいにゆきて兵衛のすけといふ女して
侍従をたつねさすれハをともせすひめきミ
の御あとにふしたるかと木丁をミるに姫君
もおハせさりけりうちさはきて人〳〵にたつ
ねさせけれともみえさせ給ハさりけれハ
あやしと
おもひ
けり」（第八紙）

絵2（第九紙）

詞3

さても中の君三のきみのもとにおハする
にやといへはこゝろかろくたち出給ふへき人
にもあらすいかなるへきとてたつねあへり夜も
あけぬれハつねにおハせしところをミれハかた
ハらなる夜の物ふすまもなくてとりしたゝめ
たるけしきなれハまことにかなしくてをの〳〵
しのひねになきけり中なこんにしか〳〵ときこ
ゆれハあきれさはきてこゑをさゝけてなき
かなしミ給ふ事たとへんかたなし中の君三の
きみあやしくこのほとこゝろうきものに思ひ
たまへりしかハかくまてとおもハさりしものを
とをの〳〵かなしミたまひけりまゝはゝあき
れたるやうして侍従かさとにかたつねたてま
つれとて中納言とのゝかたハらになくよし
にてにかミゐたり少将ハかゝりけれハなさけあ
る御返しをハしたまひてけるとおもひつゝ
けてたいのすのこにさめ〳〵となきゐ給へ
り三の君こゝかしこみありき給ほとにも
やのみすにむすひたるうすやうありけり」（第一〇紙）

なにとなくとりてミれハ姫君の手にて
　なき名のミたつたの山のうすもみち
　　ちりなんのちをたれかしのはん

とはかりかきたまひたりけりこれをみた
まひていよ〳〵あはれさまさりて中なこ
んに見せきこゆれはいかなる事のありけ
れはにやわれにハいひたまふへきにこそお
やのおもふハかり子ハおもはぬことのこゝろうき
とてこれをかほにをしあてゝうつふした
まひけりまゝはゝおとこなとのもとにおは
したるにこそよもかくれはてたまハし
いたくなけきたまふそわれもおとらす
こそなといひけれハ中なこんおほくの子と
もよりもこのきみはかりたれかハあるわか
身にもかへまほしけれともこゝろにかなハぬよ
なれはとうちくときたまへはまゝはゝ侍
従にくるはかされてよものふるまひともし
たまふもしらてとつふやきゐたれハあな
むつかしこはなに事そとてなけきたま
ひけるさるほとにひめきみハあまきみな」（第一一紙）

とうちつれて川しりをすくれハおかしう
もゆきちかふふねにのりたるものとものあ
やしきこゑ〳〵してつまもさためぬきし
のひめ松とうたひてこきゆくも
　　ならハぬ
　　心ちして
　　あはれ
　　なり」（第一二紙）

絵3（第一三紙）

詞4

中納言たいにおはしけれはひめ君なに心
なくゐ給ふにむかひていミしきことのミ
いてくることのあさましさよとのたまへハ
ひめ君も何事にやとおもひ給へり中納
言たちさまに侍従をよひての給あさ
ましきことを聞ハうちまいりハとまりぬと
はかりのたまひてかへりたまへハ心えぬ
事なれハいひやるかたなくてやミにけり
さるにてもいかなるにかとてしきふという
女のたいの方にこゝろよせなるにあひ
て中納言とのゝしか〳〵とおほせられし
ハなにことにやきゝ給かといへハしきふしか〳〵
たはかるよしをいひけり侍従さわきて
ひめきみにきこえあはせては、なからん

ものは世になからふましき事にこそと
てふたりなからひきかつきてうつふしな
からこの事たれにも聞えさすなとてい
はんほとにあなたこなたの名のたゝん
こともみくるしとそのたまふまゝはゝは」（第一四紙）
しえたるこゝちしてむくつけ女とふたり
したゑミにゑミあへり中納言うち参り
こそとゝまり侍らめさもあらん人にみせは
やとおほすほとに内大臣の御子に宰相
にて侍ける人左兵衛のかミにて廿五六は
かりなるかよろつ人にすくれたるに此よ
しほのめかしけれハ中納言いとよき事
とて霜月とさためてけりまたおそろしき
こゝろともしり給はす又まゝはゝにいひ
あはせたまへハよき事にこそいひて下に
はいとむねいたき事におもへり中納言たい
にたちよりて侍従にむかひて内参り
のとゝまりしはくちおしなからさてのミや
はとてたゝん月にハ左兵衛のすけにと思ふ
なりそのよしこゝろえておハすへしとて
はゝ宮の三条ほり川なる所をしつらひ
てそこにすませたてまつらんといとなま
れけりひめ君をやなからおほすらんことの
はつかしさよたゝあまになりて聞えさらん
所にとおもふとのたまへハ中納言とのゝかく」（第一五紙）
まておほしたらんそむきたまハんは
いとほいなきことにて侍へし北方にこそ
ほいなくおはしますともありへんまゝに
きゝひらき給てんなとそ侍従いひなくさめ
けるまゝはゝなを此事をそねミてむくつ
け女にさゝめきあはせて此ひめ君をさしも
なからんする下すにぬすませはやといへは
むくつけ女うちゑミてうはかあにのかすゑ
のすけとて七十ハかりなるおきなのめうち
たゝれたるかこのほととしころにはなれ
て人をかたらハんとするに聞入るものもな
きにおもひわつらひ侍るにこのよしを申
さはやときこゆれはいひあハするかひあり
ていとうれしくこそとく〳〵といそきてと
のたまへハかしこにゆきてしか〳〵ときこゆ
れはかすゑのすけしはくみにくさけなる
かほしてほゝゑミてあなうれしよき事
かな中納言とのや心えすおほしめさんすら
むといへはそれハ北の方のよく〳〵はからひ
てなといへはそれハよき事あなめてたし」（第一六紙）
とく〳〵いそかハやといふよく〳〵かためて帰
にけりまゝ母にしか〳〵と聞ゆれハゑミたハ
ふれて只神な月廿日比なと聞ゆれハ十日
よりさきとさゝめくを心よせの式部聞て
打さハきて侍従にしか〳〵とたハかり給ふ也
おそれハ侍れ共ゆゝしくつミふかき事に侍
は哀さになと聞ゆれハ今迄なからへておは
します心うさよとてさきのたひあまに成
なましかハそこにとゝめをきてかゝる事をも
聞するとあれハ」（第一七紙）

絵4（第一八紙）

詞5

侍従かくまての事とこそ思ひ侍らねこ
のたひはことはりにてありけるとねを
のミなきたまひけりさてかくてのミおハし
ますへきにあらすちゝ中納言とのに申させ
たまへかしときこゆれハ北の方になきことを
いひつけたてまつるにやこれをはれたりと
も又も〳〵まさるさの事出くへし又いかなる

こともかなとたはかりたまハんすらんた、聞え
さらん野山の中にてあまに成てこの世
をおもひはなれんときこゆれハこのたひ
はことハりにて侍さらハ侍従もあまに成て
は、の後世をもとふらひ侍らんいかに其時
あはれに侍らんとてふたりなから袖もしほ
るハかりにてかくハいひなからわかき人〳〵な
れハいつくにていかにすへしともおほえさり
けれハひめきみめのとたにあらハともかくも
はからひてまし今ハそこをこそなにとも
たのミたれ此月もすきなんとすいかにも
はからふへしとのたまへハ侍従もいかにとも」（第一九紙）
おほえすなといひつ、とかくあんするほとに
こは、宮のめのとなる女の宮にをくれま
いらせてのちにあまなりて住吉になん
侍けるをおもひ出ておほえさせおハしますに
やしか〳〵と聞ゆれハさるもの有とおほえ侍る
なりいかてかつけやるへきとあれは侍従か母
のもとにありける女のよくしりたるをよひ
てやりけるふミに
　さても久しきなとハをろかなるにこそ
　姫君のおひ出させ給し時は、宮もはかな
　くならせ給ひなからもいとおとなしくなら
　せ給ひてその後又侍従かは、なりし人
　もかくれにしかハたれも〳〵しる人もなくて
　そのかたの恋しさにあなゆかしさこそよ
　をそむき給ハめうらめしくもかきたえた
　まふものかなわすれ草のしるへきかやさ
　ても〳〵人つてならて申あはすへき事
　なん侍るよろつをすて、よるをひるに
　つきてまいり給へあなかしこ〳〵
なへてなるらん事にハなとかきてやりける」（第二〇紙）
すみよしに行てしか〳〵ときこゆあま君
いそきあけてなく〳〵みて御返事に
　まことに世をそむきてすミよしのわたり
　に侍なからもあさゆふそのむかしの人の御事
　のミ心にか、りてあかしくらす中に二葉に
　みえさせ給ひしをふりすてたてまつりし
　かハいかに〳〵おひ出させ給ふらんとゆかしく
　をこなひのさまたけとならせおハしませは
　忘草もなのミしてかた時もわすれたて
　まつる事はなけれともはかなき世中の
　くせにてよしいま〳〵とおもひてすくしつる
　ほとにわかき御心ちともにおほし出てかや
　うにおほせられたる事の御うれしさよさ
　ても〳〵おほせのま、に急さみつから
　あなかしこ〳〵
とかきてまいらせたりけれハひめ君侍従す
こしはる、心ちして人しれす出た、んことを
侍従にいひあはせたまふうちに中納言殿
のゆ、しき事を聞たまひなからおもひす
てすあはれにおほしたるをはなれ奉り」（第二一紙）
なはいかにおほしなけかんとおもひつ、けて
ふたりなからうつふしかちにて侍に中納言
のミたまへハさりけなくつくろひおハしけ
れともすかたもことのほかにおとろへたるに
なミたのもり出けれハ三条へわたりたまハんこ
ともちかくなりたるにいかにうつふしかちにて
おとろへたまふとてま、はゝに聞えあはせた
まへハなに事をおほすにかいかなる人をこひ
たまふにやとつふやくをこ、ろえ給ハてさ
ま〳〵のもてあそひなとたてまつり侍従か
もとへつかハしけれハかハりおほしたるおや
をふりすて、いなハおほしなけかんことのつミ
ふかさよとてまたなきたまへり中の君三の
きミわたりていかにつねにうつふしかちにハ

なときこゆれはこのほとハいかなるへきにや
世中もあちきなくてきゑもうせまほしき
ほとになんもしさもあらんにハおほしいて
なんやと袖もところせくのたまへハあなまか
まかしきなにしにかさる事ハあるへき侍従
のきミいかにこひしくおもハせんといへハ侍従」（第二二紙）
いかならん世まてもたれかしのひさふらハん
とおもひ侍るに御たハふれなからもあハれに
わすれかたくとておもへることのなミたをと
とめて侍従
　いのちあらハめくりやあふと津の国の
　あはれいくたのもりにすまはや
とくちすさミて人めあやしきほとにそ
ありける中の君物のあはれをしりたまへハ
その事となくなミたをのこひたまひけり
ひめ君露の身のはかなきハかやうなるほと
にいか、なと聞ゆれハ中の君
　ちきりてそおなし草葉にやとるらん
　ともにそきえん夜半のしら露
といひ給へハひめ君も侍従もいと、涙もよ
ほされてわかれん事をかなしとおもひけり
中の君三の君なにとなく世のはかなさを
あはれとおもひつねハこ、ろをすましておハ
する人なれハと大方の事をおもひてをの
〳〵かへり給ひけり心よせのしきふひまも
あれハたちよりたはかり給事ちかくこそ」（第二三紙）
いかにせさせ給ふへきにかいと哀にこそとき
こゆれハかやうにおほしたる事のしのハしさに
いかならん世まてもとこそ思ひ侍るとあはれハ
まことにかくてさふらへ共御かたを頼こそ奉り
つるといかにならせ給なんするにかとてうちな
きけりさるほとに住吉のあま君のほりてか
くとつけけれハくる、ほとに忍ひたる
　車奉り
　けれは」（第二四紙）

絵5（第二五紙）

詞6

京のかたハ霧ふたかりてそこはかともミ
えすひえの山はかりほのかにみえたるけし
き物おもハさらん空たにあはれなるへしい
はんやありかたきおやにひきわかれなさけ
ありしはらからをふりすて、いつちと行
らんとおもひつ、けんこ、ろのうちいかハかりな
りけんこれをみてあま君
　すみよしのあまとなりてハ過しかと
　かはかりそてをぬらしやハせし
なといひつ、すみよしにゆきたれハすミの
江とてところ〳〵すミあらしたるにうミさ
し入たるにつくりかけたれはすのこのし
たにうをなとあそふもみえてみなミハ一
むらのさとほのかにみえてとまやともに
みるめかりほしあしの屋にこ、ろほそくけ
ふりたちのほるけしきうす、ミにかける
あしたにたりひかしにハまかきにつたふ
あさかほなとか、りてきしにハ色〳〵の
花もみちうへならへたりにしにハうミ遥〳〵」（第二六紙）
とみえわたりて浪たてる松の木のま
よりほかけたる舟ともあはち嶋をゆきかふ
さまも波にた、よふか、り舟はかなくみえて
日の入ハうミの中に入かとあやしまれける
わさとならては人なとくへくもなししつかに
あはれなるすみかにてそ侍りけるちいさや
かにつくりてあミたの三そんうつしならへ
て月日の出るハかりハあま君にしにむかひ

てなむ西方こくらくけうしゆあミた如来
後生たすけ給へと申たるをみるにつけて
もあらぬよにむまれ出たる心ちしてひめ君
も侍従もとくあまに成ておなしさまにと
の給へはあま君御くしハとてもかくても
侍りなん御心にそよるへき今ハこの老う
はか申さんまゝにおハしまさすハうちすて奉
りてかくれ侍へしといへはこれもそむきか
たくて明くれハほとけの御まへにて経を
よミ花を奉り
なとし給
ける」（第二七紙）

絵6（第二八紙）

詞7

中納言ハおもひあまりて今一たひこの
世にて姫をあひミせたまへとそいのりた
まひける中の君三のきみなともひめ君
の事にふれてあはれに侍従かよろつをかし
かりし物をあはれいかなる所にすミてミ
やこの事をおほし出らんとわする、時なく
しのひつゝなき給ふまゝはゝなにことそいつ
となくいま〳〵しとなき給ふハわかいかにも
なりたらんにハよもかくハおほさしものをと
はらたちけれハおやなからもなさけなくう
たてにそおほしけるさてすみよしにハや
う〳〵冬こもれるまゝにいとさひしさまさり
てあらき風ふけはわか身のうへになみたち
かゝる心ちしてけるおきよりこきくるふねに
ハあやしきこゑにてにくさひかけるなとう
たふもさすかにおかしかりけりすみの江に
ハ霜かれのあしもこほりにむすほゝれたり
中に水鳥のつかひうハけの霜うちはらふ
につけてもおもひのこす事なかりけり中」（第二九紙）
納言とのよりはしめてかたへの人〳〵いかに
おほしなけくらんおやにものをおもはせたて
まつるハつミふかき事にこそせめてわれいき
てありとハかりしらせたてまつらんとてあま
君のもとにこわらハの京よりくしたりしに
しか〳〵のところにもちてまいりていつくよ
りといはて此ふミたてまつりてさてにけか
くれねとよく〳〵をしへてけりさてふミをとら
すれはいつくよりとてはした物出てとりぬ
名をとへと申さす又出てミれハつかひなしい
かなる事にかとてふミをみれハひめ君の
御手にて
あなゆゝしよのしのひかたさよゆくゑ
もしらぬほとになりにしことをおほし
なけく人もおはすらんあさましなからた
ひたちつるこゝろたゝおほしめしやらせた
まへなくさむかたとてはそなたの風のむ
つましくてあかしくらすになんたれ
も〳〵おハしますにやあはれむかしを
今になす世なりせハなとさても〳〵と」（第三〇紙）
のいかにおほしなけかせたまふらんことに
つミふかくこそはかなき命なからへたりと
はかり聞え奉るになんとかきすさひておくに
あさかほの　花のうへなる　つゆよりも
はかなき物ハ　かけろふの　あるかなきかの
こゝちして　世を秋風の　うちなひき
むれゐるたつを　わかれつゝ　たゝひとりのミ
ありそうミの　かひなき浦に　しほたるゝ
あまのはころも　わかことく　ほしやわつらふ
日をへつゝ　歎きますこの　ねぬなはの
くる人もなき　あしひきの　山したミつの

あさましく　なかれ出にし　ふるさとに
かへらんとたに　おもほえす　いかに契りし
いにしへの　わか身也とも　つるの子の
雲ゐはるかに　たちわかれ　行ゑもしらす
しらなミの　よるのころもを　かへしつゝ
ぬるよの夢の　ゆめならて　こひしき人を
みちのくの　あふくま川を　わたるへき
わかミならねハ　さゝかにの　くもてにものを
おもふかな　鳥の声たに　をともせぬ」（第三一紙）
とをちの山の　たにふかミ　たえぬ思ひに
としをへて　人にしられぬ　むもれ木と
くちハはつとも　なりはてぬへき
はまちとり跡はかりたにしらせねは
なをたつねミんしほのひるまを
となん有ける是をミてたゝ哀さをしはか
らるへし中納言にみせ聞ゆれハこゑもを
しますなきかなしミたまふこと
かきりなし」（第三二紙）

絵7（第三三紙）

詞8
このつかひをうしなひつらんことのくちを
しさよとてこれをかほにをしあてゝうちふ
してなか〳〵ひたすらにおもひつるよりハ悲し
くていかなる所にならはぬたひにおもむきて
あかしくらすらんとかなしさまさりてやか
てさまかへんとし給ひけるをしたかへる人〳〵
今一たひもとの御すかたにてひめ君にたつ
ねあはせ奉らんことこそたかためにも
ほいなるへき御事とそ
とゝめ申ける」（第三四紙）

【下巻】

詞1
少将此事のおほつかなさにうへのもとにお
ハしたれハ三の君しか〳〵と袖もしほるハかりに
かたり給へハ物のあハれをしりてかくの給ふ
よとおほしけりかくて正月のつかさめしに
右大臣ハ関白に成給ふ少将は中将に成て
三位し給へり中将はそれとも思ハてひとへに
神仏の御前に参りてもひめ君のあり所し
らせ給へとそいのり給けれともさせるしるしも
なかりけり菊合の哥もすきて九月はかり
にはつせにこもりて七日といふ夜もすからお
こなひてあかつきかたにすこしまとろミたる
夢にやんことなき女そはむきてゐたりひき
むかつてミれハわか思ふ人なりうれしさせんか
たなくていつくにおハしますにかかくいミし
きめをハみせ給ふそいか斗か思ひなけくと」（第一紙）
しり給へるといへハうちなきてかくまてと
は思ハさりしをいと哀れにそといひかくいま
はかへりなんといへハ袖をひかへて
わたつうミのそこともしらす侘ぬれハ
すみよしとこそあまハいひけれ
といひて立をひかへてかへさすとみて打お
とろきて夢としりせハせん方もなかりけり扨
仏の御印そとて夜のうちに出て住吉といふ所
尋ミんとて御供成物にハ精進の次てに天王
寺住吉なとに参らんと思ふ也各ハ帰て此
よしを申せと仰られけれはいかに御供の人
なくてハ侍へき捨参らせて参りたらんによ
き事さふらひなんやとしたひあひけれ共し
けんをかうふりたれハそのまゝになん殊更に思
やうありいはんまゝにて有へしいかにもくすま
しきそとてミすいしん一人ハかりをくして

しやうゑのなへらかなるにうす色の衣に
白きひとへきてわらくつはゝきして立田山
を行かくれ給ひにけれハ聞えわつらひて
御供のものハかへりにけり」（第二紙）

絵1（第三紙）

詞2

住吉にハその暁ひめ君の御あとにふしたる
侍従に聞ゆるやうまとろミたりつる夢に少
将の給ふやう心ほそかりつる山の中に只独草
枕しておきふし給所にゆきつれハわれをミ
つけて袖をひかへて
たつねかねふかき山ちにまよふかな
きみかすミかをそことしらせよ
となん有つると哀に語給へハ侍従けにいかハ
かり歎給らんまことの御夢にこそ侍れ哀と
おほさすやと聞ゆれハ岩木ならねハいかてかな
といひつゝ哀けにおほしたりけり中将ハならハ
ぬさまなれハわらくつにあたりてあしよりちあ
へり行やらぬ景色なれハ道行人あやしき物共
めをつけてそミあひける扨もなく〳〵とりのと
き斗に遥〳〵と波たてる松の一村にあしや
所〻に有ける所に行付給ひぬれともいつく
ともしらす思ひわつらひて松の下にやすミ
給ひけるに十あまりなるわらハ松の落はひ
ろひけるをよひ給てをのれハいつくに住そ」（第四紙）
此渡をハいつくといふそとゝへハ住吉となん申や
かて是に侍也といへハいと嬉しき事と聞て此渡
にさるへき人や住と仰られけれハ神主のたいふ
殿こそといへハ扨も京なとの人のすむところ
やあるとおほせらるれハすミのえとのと申
ところこそ京のあまうへとておハするといひ
けれはこまかにたつねとひて
ゆき給ひ
たれは」（第五紙）

絵2（第六紙）

詞3

江につくりかけたる家の物さひしき夕
月夜木のまよりほのかにさし入ておさ〳〵
しき人もみえすいとものあはれなり日も
くれけれは松のもとにて人ならハとふへきも
のをなとうちなかめてたゝすミわつらひ給
けるさらぬたにもたひの空ハかなしきに夕
なミちとりあはれになきわたりきしの松
風ものさひしき空にたくひてことの音
ほのかに聞えけりこのこゑりつにしらへて
はんしきてうにすみわたりこれをきゝ給
ひけんこゝろいへハをろかなりあなゆゝし人
のしわさにハよもなとおもひなからそのをと
にさそハれてなにとなくたちよりてきゝ
給へハつりとのゝにしおもてにわかきひとりふ
たりかほと聞えてけりことかきならす人有
冬ハおさ〳〵しくも侍りきこの比ハ松風な
ミのをともなつかしくミやこにてかゝる所も
みさりし物をあはれ〳〵心ありし人〳〵に
ミせまほしきよとうちかたらひて秋の夕」（第七紙）
はつねよりも旅の空こそ哀なれなとうち
詠るを侍従に聞なしてあな浅ましとむね打
さハきて聞なしにやとて心をとゝめ聞給へハ
たつぬへき人もなきさのすミの江に
たれまつかせのたえすふくらん
とうちなかむるをきけハ姫君也あなゆゝし
仏の御印ハあらたに社と嬉しくてすのこに

立寄てうちたゝけハいか成人にやとて侍従
やかてかきよりのそけハすのこによりかゝりたるす
かた夜めにもしるしのみえけれハあな浅まし
少将殿のおハしますいかゝ申へきといへハ姫君も
哀にと覚したる社さりなから人聞ミくるしかり
なん我ハなしと聞えよとあれハ侍従出あひて
いかにあやしき所迄おハしたるそあなゆゝし其
後姫君をうしなひ奉りてなくさめかたさにか
くまてまとひありき侍になんみ奉るにい
よ〳〵いにしへの恋しなといひすさひて哀
なるまゝになミたのかきくれて物もおほえぬ
に中将もいとゝもよほすこゝちそ
し給」（第八紙）

絵3（第九紙）

詞4

侍従の君の事をハ忍ひこし物を恨めしくも
の給ふ物かなと御声まて聞えつる物をとて浄
衣の御袖をかほにをしあて給ひて嬉しさも
つらさもなかハに社との給へハ侍従ことハりに覚
てさるにて尼君にいひあハすれハ有かたき事
に社たれも〳〵物の哀をしり給へかし先これへ入
せ給ふへきよし聞え奉れといへハ侍従なれ〳〵
しくなめけに侍れとも其ゆかり成声にたひ
ハさのミ社さふらへ立入せ給へとて袖をひかへて
入けりかミひやうふにやまとゑかきたる一よろひ
たてゝもやのミすにくちきかたの経かたひら
かけていと有へかしくしつらひたりいとうつく
しきあしにつらつきて所さちうちあへてかほ
さきあかミてくるしけ成御すかたをミてあま君
いそき出て聞ゆるやう姫君も是におハしま
すになん侍従哀とハみ奉りなからわかきもの
にてうちはなちに申けるにこそあまハうれ
しきにもつらきにもならひて過たる身にて
侍れハ忝く哀にみ奉るあなゆゝしいかて」（第一〇紙）
かをろかにハとて姫君に此由を聞ゆれは
我もをろかならすなから都の聞えつゝましさに
こそとの給へハそれもことハりなから万ことのや
うにこそより人よしあししらぬもの心な
き岩木なれとも是ほとの事にハゆるき侍
ものをいまハ此あまをたいせつにおほしめさハ
申さんまゝにおハしませさなくハうミ川にも入
なんといひこしらへて侍従にたゝひめ君のお
ハします所へくし参らせよといへハ侍従中将に
此よし聞ゆれハともかくもとてうれしけにそお
ほしける夜更るほとに侍従さきにたちてしるへ
しつさてもうちふすこともおハしまさすしてはし
めよりの事ともかきくときつゝなく〳〵の給ふ
ける夜もあけ日も出るほとに姫君をミたて
まつり給ひけれハさか野にてみしよりもさ
かりとみえてねくたれかミのおほめきて
なつかしさ
いふもをろか
なり」（第一一紙）

絵4（第一二紙）

詞5

かくしつゝ二かミかにもなりしかハそのわた
りにもつかうまつりし人あまた有けれハをの
つからきゝつけてそをの〳〵まいりあへりさひ
しきところともなく松のもとにてさけのミの
のしりあひけれハそのあたりの物ともおとろく
ほとなりけりかゝるほとに京にハ中将とのゝたゝ
ひとり住よしへ参り給ひぬと聞て関白殿かへ

りたるものをハすいしん所へくたされにけりさて
ゆかりある人〳〵さへもんのすけくら人の少将
兵衛のすけとのよりはしめて四位五位なと
そのかす住のえにたつね行給ていミしくお
ほつかなからせ給ふにいかになといへハしけんによ
りてこれに侍つるほとにおハすに此あたりに
あるものにミつけてなとの給へハ神仏へ参て
ハおこなひをこそすれゆゝしき御つとめかな
とてたハふれてうちわらひ給てうれしく
これまて尋給へりなにはわたりもかゝるつゐ
てなくてハいかてか御らんすへきとの給つゝ夜
ふくるほとに住のえに月さやかにしつミ渡りて」（第一三紙）
松風波のおとにたくひつゝあはち嶋まて
かよひて聞ゆるさま此よならすおもしろかり
けれハ人〳〵住のえにてあそひたハふれ給へり
三位の中将こと蔵人の少将ふえ兵衛のすけし
やうのふえさへもんのすけ哥うたひ給けりひめ
きみ侍従あま君なとこれを聞てよろつ
はるゝ心ちそ
し給ひ
ける」（第一四紙）

絵5（第一五紙）

詞6

さて夜あけけれハあまともめしてかつきせ
させて見たまへりさてその日京へのほらせ
たまふとていとこと〳〵しかりけりひめきみをハ
ゐ中人のむすめとてあひくし奉りたまふひ
め君をハあま君こゝろやすくミたてまつりな
から此ほとの名こり申ハかりなしあま君にハい
つミなる所あつけられけれハゆくすゑの事ハ
おもハすたゝあのひめきみの御事のミそおもひ
侍つるほとに今ハよみちやすくとてをくりてう
れしき物からはなれ行もさすかにあはれなり
とにもかくにもおつるなミたかなほとけになりな
むのちそやとゝまるへきとてくときけるひめ
君もなにとなく二とせまて住しところはなれ
ゆくこそあはれなれあま君もいかにならひて
こひしくかたハらさひしくおもハんなと侍従
に聞えあはせて見かへり給ひけれハやう〳〵
とをくなりゆくほとに一むらのたえまより松
のこすゑはるかにみえけれは
住よしの松のこすゑのいかならん」（第一六紙）
とをさかるまて袖のつゆけき
とおもひつゝけられけるかくしつゝ川しり
をすくれはあそひものともあまたふねにつき
てこゝろからうきたるふねにのりそめて日とひ
もなミにぬれぬ日そなきなとうたひてよと
まてそつきにけるさても京へのほりつきて
とのにまいりたまへハあやしきありきむつか
りなから北の方をしつらひてすませ給ひける
まゝはゝこれを聞て中将とのハあやしきゐ
中人のむすめをこそぬすミ給ひけれあたら人
のなくむくつけ女にいひあはせてそねミゐた
りける中納言ハ月日のかさなるまゝにおもひのミ
まさりて今一たひもとのすかたにてあひミんと
おもふこゝろのつれなさよかくてのミあかしくらす
になとおほすほとにとしのほとよりことのほかに
おひをとろへてみえ給ひけりまゝはゝこれを
ミてひめ君ハたちぬる月とかやあやし法師
にくしてこそおハしけれたしかに人のつけ侍し
なりと聞ゆれハいみしき人のことも此ひめ君
ハかりハおほえすいかにしてもたいらかにてたに」（第一七紙）
もあらハうれしきことにこそたれ人のいひけ
るにかたつねあひていきたるをり今日とた

ひミてしての山ちをもやすくこえむうれしくの
給ひたりとの給ひけれハいとなんうけくにてま
ことやたそおもひわすれてなといへハむくつ
け女あのものさふらふそかしなとそいひける中納
言こゝろつきなしとおもひてなんあミた仏〳〵
とそ申されけるさてひめ君ハかくて侍とたに中納
言とのに申さはやこゝろあはせたりとて神仏
にものろひたまハんにハたかためもいとおそろし
き事なり住よしにおハせはさてことそやミなま
しかこれハつゐに聞えたまハんすれハこゝろやす
くおほしめせとの給へハひめ君おほしなけくらんこ
とのかなしくてよにすむかひなくてとのたまへハ
まことにことハりなからもたゝ申さんまゝにてお
ハしませとて二条京極なる所にわたり給ひ
けりあかしくらし給ふほとにひめ君すきにし年
十月より御けしきありて又のとしの七月
にいとうつくしきわかきみいてきたまへり中
将おほしかしつきたまふ事かきりなしかうし」（第一八紙）
つゝすきゆくほとに中将はねかハさるに中納
言になりたまひてやかて右大将になりた
まひけり中納言は大納言になりてあせちかけ
たまへりともにうちへまいりあひてものかたり
のつゐてに老おとろへてこそみえさせたまへ
とあれハ大納言まつうちなきてまことにこれ
にてしらせたまへこゝろにかなはぬものハいの
ちにて侍かなかくてもいきてさふらふとて人め
もつゝミたまハさりけり大しやうこのつゐてにや
いはましとおもひなからなをおもひかへしてそゝ
ろになミたそもれいてけるさてかへりたまふまゝ
にかくなとかたりたまへはひめ君も侍従もおやハ
かり子ハおもはぬものそとつねハおほせられしこ
とのはかなかやうにおほくのとし月をすくしな
からかくとも聞えたてまつらておほしなけかせ
たまひつるいかハかり神仏もにくしとおほすら
むあはれ女の身はかりうらめしきものはと
てよにつらけにのたまへハ大しやうまことに
ことハりなりをさなきものもいてきたれは
われもいかハかりかハミせたてまつらまほしけ」（第一九紙）
れともこのをさなき人まてもおそろしさに
こそさりなからしらせ侍るへきこともちかくなり
たりしハしまたせたまへなとこしらへたまひ
けりかくしつゝすきゆくほとにひかるほとの女
君いてきたまひけりおもひのまゝなれハ
おほしかし
つき給ふ事
限り
なし」（第二〇紙）

絵6（第二一紙）

詞7

かやうになきミわらひみ明しくらす程にわか
君七姫君五までに成給ひけり八月はかまきと
いふ事せん次に大納言殿にハしらせ奉らん仰ら
れける程に大将殿も大納言殿も内にまいりあ
ひて又まつ物語の次に八月十六日におさなき
物共に袴き仕らんと思ひ侍ること更に申うけん
との給へハ大納言かしこまつて承りぬさりなからも
さやうのことにまか〳〵敷身にてなと聞ゆれハいかに
も思ひはからひて申也かならすとの給へハともかく
も仰にこそとて其日にも成てゆかりあるかんた
ちめ殿上人なと参りあへり大納言もすこしひ
くるゝ程に参り給へりよろつにあるめかしくて
くら人つかさのものなと参りあひていとこと〳〵
しきさまなりときにも成ぬれハ大将大納言のなを
しの袖ひかへてうちへ引入給ぬもやのミすの

まへにしとね敷てすへ聞えたり姫君侍従ちか
くよりて木丁のほころひよりのそけはいかは
かりかなしかりけんわかくさかりにおハせしすかた
のあらぬさまにおとろへてかミハ雪をいたゝきひ」（第二二紙）
たひにしかいの波をたゝミ給へりあな浅まし〳〵
とふしまろひ給ひけり扨若君姫君出しては
かまのこしゆはんとて打ミつゝ袖をかほにをしあ
てゝうつふし給へりやゝ久しく有てをきあかりて
の給ふやういはひの所にハまか〳〵しとハされハこ
そ申物を姫君の御有さまの我うしなひて思ひ
なけく娘のおさなかりしにたかハせ給ふ所なくその
昔さへ思ひ出てとて忍ひかねつるになんゆる
させ給へとてむせひ給へり是を聞て姫君侍
従こゑもたてぬへき心ちそし給ひける涙の色
ハうちきのたもとにくれなゐそめの心ちするま
てそなりにける大将是をミ給ひて涙もせき
あへすみとミきと聞人心あるも心なきも泪な
かさぬハなかりけり扨事共はてぬれハ人〳〵に引
出物さるへきやうにし給ひけるその内に大納言
殿にハこうちきのなへらか成を奉りたれハあやし
なからかたにかけてかへり給ひぬ大納言かへる侭
にまゝはゝにむかひて大将の我をむつましき物
に覚してもてなし給ふうつくしかりつる若君姫
君かな哀是を我まこ共と思ハゝいかにうれしから」（第二三紙）
ましゐ中人のむすめなれ共さいはい有人か
な扨も其姫君の我うしなひて思ひ歎く姫
おさなかりしにさも似給へるよ哀つねにみ奉ら
ハやとの給へハまゝ母三の君のもとへをハせし人な
れハ其ゆかりとてむつひ給ふ社哀その子たち
を三の君の中にまうけ給たらハこゝかしこのために
めやすかりなん物をあたら人のなといへはむくつ
け女関白殿ハけすハらの子なれハとてもてなし
給ハぬとそいひける大納言殿ハこうちきのふり
たりつるをあやしと思ひてとりよせてミ給へは
たいの君にきせはしめし時のうちきに似たり
おひのひかめやらんとてうち返〳〵能〻見給へハたゝ
それにて有ける其時にむねさハきていかにして
かもち給へハ我にしもえさせ給へるもあやしとて
たゝさうしき二三人ハかりくして大将のもとへをハ
してしんてんのすのこにゐ給へり大将いそき出
給ひてあしくにこれへとあれハ大納言申され
けるハ申出るにつけてよにをかかましくなめけに
侍れ共万になつかしくおハしませハ参りつる也
ゆるさせ給へとてきのふ給ハりたりしこうちきハ」（第二四紙）
我うしなひて候し物おさなくてきせそめし
うちきにて侍るを老のひかめにや侍らん我心
にかゝるまゝに人めもしらすはしり参りつる也
と申されけれハ此由姫君聞給ひて今〳〵と
待ゐ給ひけれハ大将の給ぬさきに姫君侍従い
そき出て涙にくれて物をたにいひ給ハねハ大納
言是をミて心も消かへる程也いかに〳〵とあき
れゐ給へりやゝ久しくありて心しつまりて大
納言姫君をハそむきて侍従にむかひてくとき
給ふやう姫君こそあやしのおやとてとてもかく
てもと覚して音信給ハさらめそこをはいかハかり
かハ思ひ聞えし今まて命つれなくてめくりあひ
侍れハこそけふハけさんに入思ひ消なましかハ後の
世迄も思ひにてよミちのさはり共なりなましか
我なれるさま岩木ならすハみ給へしあなゆゝし
の人の心やたゝ命のミこそ嬉しけれ明しくらしか
たくてつもりし月日いくら程まて成ぬとか思
給ふ哀〳〵人の思ひは成物とてうち泣給へり大
将姫君侍従をの〳〵はしめよりおハりまてのこと
ともかきくときつゝ語り給ひてをろかならぬ」（第二五紙）
よしのたまひける時によのありさまむかしも
今もかゝるためしありかたくそおほえけるさて日

くれぬれハ大納言かへり給ひてまゝはゝにの給
やういてやたいの君にたつねあひて侍りつる
まことにあやしのほうしにくしてひんかし山におは
しけるとてたゝうきハなからふへくもなしとてま
まはゝあなうれしやないかやうにておハしつる
そこまかにのたまへおほつかなきにといへはいか
なる人のうとましきことをたはかりにけるにか
おもひあまりてすミよしまてまよひゆきたり
けるを大将との物まいりのつゐてにもとめあひ
てとし比くしておハしましけれとも世中のむく
つけさには、かりてかくとものたまハさりける
そやあやしの法師にくしておハしましきやよく
〳〵聞給へとありけれハさて〳〵とてくちうちあ
きてめしハたゝきてかほあかくなしていひやる
方もなくてそゝろきゐたり中の君たいらかにて
おハしましける事の嬉しさよとて悦ひ哀〳〵とて
み奉らハやとておやなからもうとましくそおほ
されける大納言よろつくとき立て身にそふへ」（第二六紙）
きものゝくハゝりくしてこゝろうき世には
ましろひもものうしとてひめきみのはゝミ
やの三条ほりかハなるところへそわたりたまひ
ける大しやうこのよしをきゝたまひていかに
さふらふましき事なりたゝもとのやうにてお
はしますへきよしのたまへハ大納言との申
されけるハあさましくまとひありきけんもの
をとりをきたまひてミせたまへハこの世なら
すくひめすともいなミともおもふへきにあら
すこれハいかにのたまふともかなふましきよし申
たまふひめきみもまめやかにいろ〳〵とゝめ申
たまへともきゝいれたまハてわたりたまひけ
れは三てうへさま〳〵のものともたてまつりた
まひて人〳〵もまいりあへりさてもひとりお
ハすへきにあらすいたはしきとて大将のをハ
にたいの御かたと申人をそむかへさせたまひ
けるそのむかしたいにすミける人〳〵さなか
ら大しやうのもとにまいりてよろつすきにし
かたの事ともかたりいてゝなきみわつらひミ
あかしくらしけるその中にもこゝろよせのしき」（第二七紙）
ふハまたなきものにそおほしけるくわんはく
殿よりはしめてよろつの人〳〵ゐ中の人のむ
すめとしり給つるほとにはやあせちの大納言
との宮はらの御むすめとてさもありかたきなか
らひとて人〳〵もいひあひけるとかやこの事を
聞てひやう衛のすけ中の君ともかれ〳〵に成
けりさるまゝに中のきみもおやなからうとまし
とそおもひけるされハ人のとをさかるもことはり
なりとてふたりなからねをのミそなきたまひ
けるひめきみ此よしを聞給ひてむつましか
りし人なれハとてむかへ奉りてすきにしかた
のよのふしきなる事ともかたらひあかしくらし
給ひける大将もよき事とて
大事の
ことにそ
思ひ給
ける」（第二八紙）

絵7（第二九紙）

詞8

とし月ゆくほとに大将とのにハちゝ関白ゆつり
給ひぬいよ〳〵すゑの世たのもしくそ侍ける若
君ハけんふくせさせ給て三位中将とそ申ける
ひめ君ハ十八にて女御に参り給ひける侍従ハお
とな女にてよろつに大事の人にそ思ハれて内
侍になりぬみ聞人うらやミあへり大将ひめ君
すゑまてはんしやうしてめてたくそおハしける

扨ま、母みきく人〳〵にうとまれ朝夕ハ音をの
ミなき給ひて世中おとろへてつゐにはかなく
なりたまふむくつけ女ハあさましきありさま
にてまとひありきけるとかやむかしもいまも人
にはらくろなる人ハかゝる事なり是をミきかん
人〳〵ハかまひて人よかりぬへきなりとそ」（第三〇紙）

On the Explanatory Notes and Photographic Reproduction of the "*Sumiyoshi Monogatari Emaki* (Tale of Sumiyoshi)" Formerly in the Price Collection

HIROMI, Nobuhiko

In 2019, part of Mrs. and Mr. Etsuko and Joe Price Collection was acquired by the Idemitsu Museum of Arts. Indeed, the core of these new acquisitions consists of works by unique painters who departed from conventional academism. Previous studies have mainly focused on the works of such eccentric painters. However, this collection also holds paintings by many orthodox schools including the Kanō and Tosa.

The objective of this paper is to record the summary regarding the text and painting of one such work, "*Sumiyoshi Monogatari Emaki* (Tale of Sumiyoshi)." The tale of a young princess losing her mother and being taken in by the stepmother, further enduring obstacles in love and court service, and finally met with a happy ending unfolds across three handscrolls. Each scroll measures 32.3 centimeters vertically and is around 15 meters long. Texts and paintings alternate across the wide expanse of each scroll. The texts are written with scrupulous brushwork on *ryōshi* paper ornately adorned with gold ink underpainting of plants. The paintings are also completed with great attention to detail and thus present an orderly, meticulous expression.

This paper mainly examines the characteristics of expressions in the paintings and discusses issues of authorship as well as its period of creation. Studies in recent years have revealed that the 17th century was an era during which many great illustrated handscrolls were produced. This paper aims to explore the significance of this work within what can be called the "Era of Illustrated Handscrolls," or the history of painting during the early modern period.

出光美術館研究紀要 第二十八号
（二〇二三年度）

二〇二三年三月二十五日

編集 公益財団法人 出光美術館
発行 東京都千代田区丸の内三―一―一
電話 〇三―三二二三―九四〇二

制作 佐藤編集事務所

印刷 東洋美術印刷株式会社

© Idemitsu Museum of Arts, 2023
Printed in Japan